
ロスト・フィラデルフィア

礎衣 織姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロスト・ファイラデルフィア

【NZコード】

N4800L

【作者名】

穂衣 織姫

【あらすじ】

人類が新しい地球に移り住み、十四世紀半が過ぎた。人類は身体的な進化を遂げてもなお、相変わらずマフィアやテロの脅威にさらされ、それらに立ち向かう軍事機関なくしては生きて行けない世相であった。そんな中、第3段階の進化系であるシーランにテレキネシス能力を司る遺伝子「セフィラ」が発見された。しかし奇跡的にその能力を覚醒させた一人の少年シギルが暮らしているのは、巨大テロ組織ガガード・パラディオンの研究所だった。

セフィラ遺伝子研究の第一人者であるラウ・コード博士がシギル

に懸念していることは、彼がシーランの最たる者であるということと、狂人であるガゲード・パラティオン總統スカイフィールズの道具として利用されることだ。そして何より、博士は少年に対して取り返しのつかない罪を犯していたのである。

今こそ、その罪を償う時だと、博士は決意した。

01（前書き）

SFファンタジー？軍事ものですが戦闘シーンはそれほどあります
ん（たぶん）。一見こ難しい感じですが、全然そんなこともあります
せん。同性愛ネタもあるので、ムリな方は「じ」遠慮下さい。男女の普
通恋愛もあります。基本的には眞面目なお話です。宗教ネタもあり
ますが現存する宗教とは一切関係ありません（参考にしている程度
です）。また宗教を支持するものでも批判するものでもありません
ので「じ」了承ください。

* 注意 *

ただいま再編集中。再掲載日は未定です。あらかじめ、「じ」了承く
ださいますよつ、お願ひ申し上げます。

時は第二地球惑星暦一三五四年。人類が生まれた地球を捨て、太陽系を越えてから十四世紀半が過ぎた。思い返せば、「第一の太陽系」と呼ぶにふさわしい銀河の、この惑星とめぐり会えたことは奇跡と言うしかほかにない。

それはまさに「地球の終わり」という時だった。要因は昔のSF小説や映画にあるような、人間によつてもたらされた悲劇や隕石の衝突ではない。星の寿命という物質世界の定めにしたがつた超自然現象だ。

なんにしても、そこで生きる者たちにとつては一大事。結果が同じなら原因など関係ない。人々は一縷の望みを託し、全世界協賛のもと開発した探査機を打ち上げたのである。

銀河探査機は見事に発見してくれた。まるで神によつて用意されたかのような惑星を。豊かとまではいかないが動植物が生息し、人が住むのに充分な環境があり、なにより知的生命体の存在がない。つまり何者とも交渉せずに堂々と入植できる土地だ。

ゆいいつ問題となつたのは、国土である。大地の形状も森林の割合も、なにもかもが違う。すべての国が協力して成し得た危機からの脱出であつたのだから、土地の分配が不公平であつては困る。各国は長い話し合いの末、思い切つた決断を下した。

「我々はみな、地球人である。よつて、これをひとつ区切りとし、国という概念を捨て去ることを決意する」

誰もが心にいだいていた理想とする形が誕生した。つまり国境が消えたのだ。人類は新たな自由を手に入れた。住処、言語、食料、物資、金、資源……すべてがすべての民の物であり、その恩恵は平等となつた。

現在の組織形態の基礎も、この頃ほぼ完成されている。行政機関、軍事機関、法廷機関、警察機関、宗教機関、教育機関、医療機関と

いつた主要部分だ。全機関は独立・分権されており、特に強い権力を保有している行政と軍を除いては、五機関とも同等に権威を持っている。

そうこうして、新しい地球に歴史と呼べるものを作り込んで久しくなりだした頃。

人類は、史上稀に見る急速な進化を遂げた。といつても猿から人間にというような明白なものではなく、外見的な変化はほとんど見られない、だが飛躍的な進化だ。

第一段階の進化では、奇形をともなう遺伝子上のトラブルが皆無になつた。

第二段階では、視覚・聴覚の障害を持つて生まれる子がいなくなつた。

第三段階では、ガン細胞を発症する確率が格段に下がつた。

つまり遺伝子が正常化、安定化、そして強化されていったのだ。それは人類が想像もしていなかつた、願つてもない副産物だつた。

段階系の型が固定していくと、各人種の大別がなされるようになつた。母なる地球より渡つて来た従来型の人間をアースリング。一世紀なかばに現れた第一段階系の人間をネオ・ゲノム。六世紀後半からの第二段階系をアドサピリア。そして十世紀初頭に誕生した第三段階系となる人間をシーランと定めた。

しかし同年、アースリング最後の生き残りであるレイモンド・オクラが永眠したことによって、ひとつ大きな時代が完全に幕を閉じた。オクラは享年百三歳だつた。

だが新しい地球での暮らしあは、良いことばかりではなかつたし、いつまでも平穀ではなかつた。国境こそなくなつたが、新人種が多様化していくと、小競り合いや衝突はさけられないものとなり、人類はアースリングが築いた初心を忘れ、理想郷を踏みにじり、再び戦闘や紛争を各地で起こした。ある時は強大なマフィアが世界を牛

耳り、ある時はテロリズムによる破壊活動が頻繁におこなわれ、ある時は政治家による汚職事件が世相を乱した。

一三五一年。ベストラ・スエム率いるマフィア集団が結成される。北大陸西南部の海岸沿いにあるキングフィッシュヤーズ・レイクを拠点に拡大を続け、麻薬、ギャンブル、売春、恐喝、詐欺、人身売買などの、ありとあらゆる悪行を基本財源とし、やがては油田や鉱山から出る収益や各企業団体の利益、最終的には税収まで懷に納めるほどの圧力と勢力を獲得した。

一三五四年。第三段階進化系「シーラン」に対する医学研究において、テレキネシス能力を司る遺伝子「セフィラ」が発見される。発見者は生物学博士ラウ・コード。

一三五五年。ラウ・コードの発見に触発された数名の若い研究員による、セフィラ研究所ガガード・パラディオン（通称GP）設立。一三六〇年。正規研究所であったはずのGPが突如テロ組織へと変貌。時同じくしてラウ・コード博士が行方不明となる。

一三七〇年。ベストラによって長く無法地帯であったグラスゲートに、孤児である子供たちだけの組織が立ち上がり、驚くべき快進撃でベストラ・ファミリーを撲滅。リーダーは弱冠十一歳の少年だったというが、詳細は語られていない。

一三七一年。ベストラ・ファミリー壊滅の影響を受け、それまで息をひそめていたテロ集団が活発化。中でもGPは最も巨大化した。

一三七四年。消息を断つていたラウ・コード博士がGPの専属学者として再び世に現れた。セフィラ覚醒実験の成功論文を作成、発

表。ただし被験者の顔や氏名、年齢、その他の詳細などは公表せず。現在も一個体であるこのシーランはGPの手中に置かれているものと思われる。論文に示されたセフィラの能力値とその可能性は底知れず、それはラウ・コードの名を高めると同時に、GPの脅威を増幅させた。

政府はテロ対策として軍事拡大支援を余儀なくされ、毎年、税の三分の一を軍資金として民衆から吸い上げている?????

乱れた灰白髪と年輪を刻んだ顔は、騒々しく唸る警報と炎に照らされていた。両眼には光が、ささやく声には力が込められた。その男、ラウ・コード博士は、七十を過ぎたとは思えない気迫で、今、十五歳の少年と向き合っている。

「いいね、シギル。ここを出たら、すぐに南大陸へ飛びなさい」
そう言い、少年の手にプラスチックカードを握らせた。

「これは、おまえのIDカードだ」

少年がカードを覗き込むと、青銀色の髪と碧色の目をした、無表情な自分の顔写真が見えた。横には知らない名前が印刷されている。
「シルバー・クラウズ・ラインビル？」

呟くと、博士は一度だけ深くうなづいた。

「今日から、おまえの名前だ。それを持つてグラウコス軍事基地へ行き、入隊試験を受けなさい」

すると少年は、少し皮肉気に口の端を上げて笑った。

「スパイでもさせようっていうの？」
博士は、かぶりをふった。

「軍に身を隠していれば、とりあえずは安心ということだ」
少年は眉間に蹙らせた。

「笑っちゃうね。今日の敵は明日の友？」

互いに、にがい顔で視線を交わす。

ここは北大陸サマイト森林地帯の奥深くに建立された、巨大テロ組織ガゲード・パラディオンの研究所内である。

少年は博士の手で「セフィラ」と呼ばれる生きた破壊兵器となつた、史上初の覚醒したシーランであり、まだ唯一の存在だ。つまり二人にとって軍は最大の敵であるはずだつた。

軍とGPとの抗争は十年あまりと比較的浅いが、軋轢は深い。軍の最高位に立つ男がマフィアとテロリズムを撲滅しようという志のもとに生きているせいもあるが、セフィラの登場によって、さらに警戒が強まつたためでもある。ここへきて彼らが軍に救いを求めようというのは滑稽な話だ。

しかしもはや研究所は崩壊寸前。少年の脱出を図るため、博士が中心部を爆破したのだ。

「ここは何者かによつて襲撃された。そしておまえは、その襲撃による爆発事故で死んだのだ。いいね？」

と博士は念をおす。そんな嘘がどこまで通用するのかわからないが、博士は、この少年をただ自由にするために必死だつた。

研究費用欲しさにGPに与したことや、名声に目がくらみ、どこからか拉致された少年の未来をゆがめてしまつたことを、後悔していたのである。特にGP總統スカイフュールズについては、悔やんでも悔やみきれない思いだつた。

出会つた頃のスカイフュールズは五十代前半の中肉で小柄な、野心に満ちた顔つきの男だつた。すでにセフィラによつて世界を恐怖におとしいれ、殺戮と破壊を夢見ている狂人だつた。博士は、それを薄々感づいていながらも、みずから彼の世界に身を投じてしまつたのである。研究さえ成功すれば、なんとかなると……しかし過ちは過ちでしかなかつたのだ。

博士は少年をみつめ、その肩を抱き寄せた。

「本当にすまないことをした。償いは必ずする。グラウコス基地に着いたら、ファウスト・ロスライン大佐をたずねなさい」

「……？」

どうして、と少年は言いかけた。

ファウスト・ロスレインといえば、空軍に属し、空中戦において右に出る者はいないと噂の人物だ。『グラウコスの鷹』と称され、恐れられている。GPにとつては最要注意人物の一人だ。

ところが、博士の口からは思わず言葉が出た。

「おまえのセカンドネームはロスレイン。彼は、おまえの実の兄だよ、シギル」

少年は衝撃に目を見開いた。

「？？兄さん？」

「そうだ。ずっと消息がつかめないでいたが、おまえが拉致されたテロ事件のあと、軍に保護されていたことがわかつてね。その後、彼は君を捜すため軍人になる道を選んだのだ。行方不明者を捜すには良い環境だからね」

「もう連絡を？」

「いや。偽造IDを作ると、受験手続きをするのが精一杯だった」「じゃあ、まだ俺のことは知らないんだ」

「ああ」

ため息をついて、少年は首を大きく横にふった。

「だつたら、たずねない」

「な、なんだ？　いつたいどうして。せっかく兄弟の再会を果たそうというのに」

「どんなに生まれ変わろうと努力をしても、たとえ一生黙秘して過ごせたとしても、俺がセフィラだという事実は消えない。弟とだけ打ち明けて、万事うまくいくなんて考えられないよ。相手は空軍大佐だ。GPの上層だつて目を光らせている。それに博士が俺の兄さんを知っているということは、スカイフィールズだつて……。もしかしたら軍に利用されないともかぎらない。セフィラだということを隠して生きるなら、兄弟だつてことも隠しておくべきだ」

博士は哀しげに眉をゆがめた。

「今はそうだ。セフィラだと公表するには時期尚早だ。できうるか

ぎり隠しておくのがベストだと思う。しかし私は、もし正体が明るみに出ても、おまえがお兄さんや、その周りの組織に甘えてもいいのではないかと思っているのだよ。セフィイラはこの世の脅威でも、おまえ自身は脅威ではない。そのことは、きっと心正しい者がよく理解してくれるはずだ。時間をかければ、より多くの者がわかつてくれるようになるだろう。私がおまえをグラウコスに送ると決めたのには、その想いもあるからなのだ。だが、おまえの望みは別のことにあるようだな」

少年は黙つた。

「シーラン特有の血だな」

と博士は言った。

シーランは、最も兄弟愛の深い種として知られているからだ。同じ両親を持つ者同士でしか血液型が一致しないという特徴を持つため、医療の点から見ても大切な存在である。彼ら自身は「人間愛なのか単なる自己防衛なのかわからないが、とにかく兄弟姉妹への想いは魂を分かつほどのものだ」とも言つ。

それを博士は密かに、世界から人類が淘汰されていく前兆なのではないかと、おびえていた。

極端な話、シーランは兄弟さえいれば良いからだ。ともすれば、そのために人間の三大欲である「物欲」「性欲」「食欲」を切り捨てても生きてゆけるという、高僧のような精神構造を持つている。ゆえに既婚者は稀だ。しても離婚率が高く、必然的にシーランから生まれる子供は少ない。いわゆる少子化。そこが問題で、実はシーランの人口減少はダイレクトに「人類滅亡」へのカウントダウンなのだ。

かつてアースリングがネオ・ゲノムにとつて代わられたように、進化によってネオ・ゲノムはアドサピリアに、アドサピリアはシーランへと変化している。歴史は逆行することなく、アドサピリア同士の夫婦間にシーランが誕生することはあっても、シーランの間にアドサピリアは生まれない。この進化をたどれば、シーランによつ

て人類は終焉の時を迎えるだろう。

シギルにも、もう兄を慕う心が芽生えている。博士にはそれがわかつた。シーランでなくとも、血のつながった兄弟がいると知らされれば動搖し、逢いたいと願うのが普通だ。シーランなら、なおさら切実であろうと。

「自分の運命がお兄さんの生活をおびやかすのではないかと、気に病んでいるのだね」

勝手に断定的な見解を示したが、はずれではない。少年の瞳の翳りが答えを導き出している。シーランであることの哀れを感じずにはいられない博士だったが、今は感傷にひたつている時ではないと、シギルの両肩を強く叩いた。

「君がたずねたくないと言うなら、無理強いはしない。だが、入隊は必ずするように。グラウコスは軍の最高峰。スカイフィールズから最も遠い場所だ」

少年はうなずき、博士に先導されるまま研究所から脱した。外は暗く、星の明かりが見えた。草の間からは虫の声が聞こえた。

「博士、元気で」

「ああ、おまえも。幸福を祈る」

短い挨拶のあと、少年は蒼いオーラに包まれて宙へ浮かんだ。遙か上空にまで高度を上げ、流れ星が去るように天を駆ける。

博士は夜空をまぶしそうに見上げた。

「シギル、おまえは素晴らしい。おまえに逢えて、私はとても幸せだったよ」

夜明け前。南大陸の東に位置するグラウコス軍事基地の門前。五百メートルほど離れた先の林の茂みに、シギルは降り立つた。あたりはまだ薄暗く、人の気配はない。横に長く縦にそびえる堀が、遠く、まるで遺跡のようにひっそりとたたずんでいる様子が見えるだけだ。シギルはその場に座り、夜明けと検問所の開かれる時を待つた。

ヒューラウコス基地は、世界に七ある軍事基地の中で最も大きく、総本部を中心にかかえている。兵士はおよそ二万五千人前後。その他、救急隊や医療班、管制塔員や兵器の整備班等を八百人ほど雇用している。多くの精鋭が集い、毎年、士官候補となるような新入隊員が募られるほどだ。

士官候補は、入隊試験結果や実際の訓練、実績を通じて、將軍の地位にある者から選ばれる。つまり、入隊試験さえ突破すれば、誰でも士官になれるチャンスがあるというわけだが……

国という概念がない現在では、テロか緊急災害時でもないかぎり出動はしない。よって実績を積むのは困難となっている。士官または士官候補となるには、將軍の目にとまるという運も必要なのだ。

三時間ほど経過した。朝日が照らしはじめた大地をみつめ、シギルは立ち上がった。検問所が開かれたのだ。ゆっくり門に向かって進むその足は、重くもあり、焦燥にもつれそうでもあった。

「IDカードをご提示ください」

検問のいかつめらしい兵士が言った。シギルはカードを提示し、職務質問を受けた。

「ここへはどういったご用件で？」

「入隊試験を受けに来ました」

「お名前は？」

「シルバー・クラウズ・ラインビルです」

「それでは、少々お待ちを」

兵士はIDカードを機械に通し、データとの照合をおこなつた。一分後、カードが手に戻された。

「受験登録データと一致しました。どうぞ、お入りください。会場はまっすぐ行つて突きあたりを左、一ブロック目を右に曲がった所です」

「わかりました。ありがとうございます」

それから続々と、シギルと同じか、少し年上くらいの少年少女たちが、同じようにして門をくぐつた。両親に見送られる子も少なくはなかつた。シギルはそんな子供たちを横目に、敷地内をキヨロキヨロと見まわした。規模は大小様々だが、建物は半球体のシェルタ－のような造りで、地味な土色をしている。

彼は、ちらほらと姿を現しながら兵士の中に大佐の記章をつけた者がいなかと、無意識に目をやつた。だが深緑を基調とした軍服姿の上等兵や一等兵、グレーの制服に身を包んだ新入隊員ばかりだ。黒を着る士官はいない。残念ながら、試験会場までの道のりで、そういう人物に出逢うことはなかつた。

* * *

試験は筆記と実地に分かれていた。試験期間は一日。本日は筆記試験である。この筆記で優秀な成績をおさめた者だけ、基地内の宿泊施設で一晩明かし、翌日の実地試験を受けることができるのだ。

シギルは明朝、実地試験に臨んでいた。筆記試験を突破したのである。実地試験は訓練施設区域内にある陸軍管轄訓練場で開始された。基本的な体力測定のあと、「ワイヤーを使った高所から低所までの移動と低所から高所への移動」、「人命救助における基本動作」

などの項目がおよそ二十五項目、課せられた。

試験結果は夕方、測定員五名のほかに、三名の士官によって決定される。士官選考員については毎年無作為で、今年は陸軍大佐、空軍中佐、海軍大尉が選出されていた。

陸軍大佐はサウス・ウイビーンという二十一歳の男で、茶髪に茶色い瞳をしている。物腰やわらかげな長身の一枚目だが、『大陸の龍』と渾名をつけられるほど勇猛果敢な人物として一目置かれる。

空軍中佐ルーヴ・サーヴァル・メイレンは二十三歳の男で、黒髪に切れ長の黒目。東洋系で、やや細身。あまり目立った功績はないが、計算能力に長けた人物として重宝されている。

海軍大尉は、女性ながら男性陣に引けを取らぬ手腕をふるい、過去の海上戦、潜水戦ともに武勇をとどろかせた金髪の美女である。歳は二十歳。名をマチルダ・マイセンといい、彼女の父が『海神』

の異名を持つ海軍大将フォレスト・マイセンであることは有名だ。

さて、今回の入隊試験は受験者数五百名。実地に残れる者はその内の半分。さらに合格者となるのがその半分というものだったが、審査員の測定員と士官選考員の前に並ぶことができたのは百十三名と、若干定員を割る結果になつた。

軍服姿ではもつたないほどのブロンド美人・マチルダが、大尉の記章を襟元に光らせながら、前列に並ぶシギルをみつめた。

「あなたが、シルバー？」

「はい」

シギルは軽く敬礼し、マチルダは細く美しい眉をひそめた。
(ちょっと華奢ね。それに、ずいぶんおとなしそう。記録は間違いないんでしょうね?)

と疑わしげな視線を投げる。が、それも束の間。彼女は微笑み、「人は見かけによらないものね。すばらしい成績よ。トップだわ。おめでとう」

と言つた。一瞬、全員の目がシギルに向けられた。それは嫉妬と

羨望の混じった鋭い眼差しだつたが、シギルはたじろぎもせず、淡々と会釈をした。

「ありがとうございます」

「あり、どういたしまして。あなたのよつて文武両道で容姿のいい子は、こちらとしても大歓迎よ」

「マチルダ！ 新人に手を出すなよ！」

シギルがなにか返答に困ると、横からサウスが口をはさんだ。
無造作に、手にある資料でマチルダの豊かな胸元を叩く。が、その行動は親愛の情の深い、とても慣れたやりとりのように映った。

「あら～、人聞きの悪い。私をそんな浮氣者だと思つて？」

「違うのか？」

サウスがあざけた口調で問い質すと、マチルダは両手を腰にあて、すねてみせた。

「失礼ね。私はファウストひと筋よ！」

突然出てきた兄の名に、シギルはドキッとした。そんなシギルに気づいたのかどうか。ふとサウスの視線が、熱くそそがれた。

「君

「はい」

「かわいいね」

「は？」

「いやー、好みだ。俺と付き合おうよ」

公衆の面前で大胆に告白するサウス。その腹にマチルダがすかさず肘鉄を食らわせた。

「さつき手を出すなつて言つたの、あなたでしょーーー？」

「ぐはっ。相変わらず容赦なしな、マチルダ。俺は今の一撃で死ぬぜ」

「バーカ」

オーバーに苦しんでみせるサウスに冷たく言い放つと、マチルダは新入隊員に向きなおつた。

「ゴメンなさいね。こんなバカは放つておいて、みなさんにお待ち

かねの合格証書をお渡ししましょうね

「こら！ バカとはなんだ、バカとは！」

マチルダは、となりでわめくサウスをわずらわしそうに無視した。

「名前を呼ばれたら、返事をして前に出なさい」

新入隊員は全員あきれた様子で一人を、特にサウスを見た。が、

シギルだけは冷静に彼を見据えた。

（大陸の龍も海神の娘には敵わないようだな。でも俺はピスマイヤーの一戦を覚えている。空軍指揮官ファウスト・ロスレイン、陸軍指揮官サウス・ウイビーン？？噂に違わず最強コンビだった。あの時はたまたま凌げたけど、今度やりあつたらどうかな？ もう一度と当たりたくない相手だ。特に一人は兄さんだし）

サウスは、この一人違つ視線をくれるシギルを敏感にも察知し、首をかしげた。

「どうした。俺の顔に何かついてるか？」

シギルは少し眉尻を上げた。

「いえ、ピスマイヤーの一戦でのご活躍を耳にしたことがあります。指揮官をなさつたそうですね。大佐はあれで、大陸の龍といふ名を不動のものにしました。こんなに早い段階でお会いできるなんて、思つてもみなかつたものですから」

サウスは露骨に驚いた。

「コアなこと知つてるなー」

シギルはすかさずニッと笑つた。

「尊敬していますから」

「へえ？ 面と向かつて言われると照れるな。嬉しいよ。ありがと

う

サウスは素直に満面の笑みをたたえた。

どの戦で誰が指揮をしたとか、誰が活躍したかなどということは、ほとんど身内か関係者でないと知らない。関心も持たない。軍隊に望んで入つてくる新入隊員ですら、あまり内情というものは詳しくないので。

なので、外部から来た人間に褒められたことのないサウスは、未体験な喜びに気分をよくした。さらに、二人の会話を聞いて、とたんに目の色を変えた新人連中を見渡し、胸を張った。「ピスマイヤーの一戦は知っている。有名な戦闘だ。あれを指揮していたのがこの大佐？ 嘘だろ？ すげえ」と、開いてふさがらない口が物語るのを見て、ご満悦といったところだ。

しかしふとサウスは、にやけた顔を真顔に戻してシギルに視線を返した。

「だがな、ここだけの話、あの戦はセフィイラ一人のものだと俺は思つていい。いや、むしろ確信している」

「？？！」

「セフィイラを知つているか？」

サウスの問いは、シギルの気持ちを沈ませた。それは表情にも表れたが、サウスはセフィイラに対する脅威に青ざめたのだと思つた。

「はい。唯一完全にテレキネシス能力に覚醒したシーランです」

「そのとおり。GPの手にあるのは悔しいが……ピスマイヤーはセフィイラの初陣だった。ありやあ、生きた心地がしなかつたな。あの恐怖は対峙した者にしか、わからないだろう。なにかこう、目には見えない強大な力が大氣を包んでいた。もちろん俺は死を覚悟した。実際、死人が出ないような戦じやあなかつたんだ。しかし蓋を開けてみると、仲間は誰一人死んでない。俺も生きて帰つた。それで思つたんだ。セフィイラは始めるから、死人を出さないようにコントロー^ルしていたんじゃなかつって。まいつたよ。もう全面的にやられたつて感じだ。奴にとつちや、あの戦はテストみたいなもんだつたのさ。死人を出す必要もない程度の。いや、もしかしたら人殺しさはしたくなかったのかもな。なんにしても、GPの支部をひとつ潰した分、戦闘機や戦車はほとんどガラクタにされたから、物質的な損害はデカかつたわけだけど」

シギルは「当たりだ」と心で呟いた。

ピスマイヤーでは確かに、最初から最後まで戦死者を出さぬよう

にと努めた。それが博士の要望だつたからだ。しかし、それを前面に押し出して戦つてはいない。戦にシギルを起用したスカイフィールズの意図が「セフィラの威光を全世界に知らしめること」だつたからだ。そのために軍人など皆殺しにしても構わないとまで言つていたほどだ。

博士とスカイフィールズの希望を同時に満足させるとなると、シギルは相手に死の恐怖を味合わせつつ、実際には救うという纖細な作業をしいられなければならなかつた。

『なにがあつても、その力によつて人を殺めではならない。ひとたび誤つた使い方をすれば、きっと取り返しのつかないことが起つる。私がおまえを地上の魔にしようと思つて育ててきたわけじゃないことを、よくわかつてほしい』

博士は常に、そう諭していた。シギルは育ての親である博士の言葉を信じた？？

シギルは、はかる田つきでサウスをみつめた。そしてひとつ、軽いため息のあと、

「セフィラがなにをしようと、あなたが優れた軍人であることに変わりありませんよ、大佐」

と、かつての好敵手を称えてニコリと笑つた。一瞬、サウスはマチルダと目を合わせた。

（こいつ新入りのくせに、緊張するとか不安に思うこととか、ないのかね？ いくら俺がとつつきやすい性格でもなあ。普通は相手が上官つていうだけで畏縮するものだがなあ。こいつの態度、誰かに似てるよなあ？？誰だつたかなあ）

ともあれ無事に証書授与式を終えたサウスは、士官食堂へ入つて、いつもの席の先客の顔を見た。

「遅かつたな。先に食べてるぞ」

さわやかな声で言った先客は、一才歳下の同僚ファウスト・ロスレイン空軍大佐である。白金の髪が美しく、碧眼で、涼しげな美青年だ。身長はサウスと変わらない一八三センチ強。スタイルもいい。どうしてモデルじゃなく軍人なのか、意味がわからない男だ。しかし「グラウ「スの鷹」という異名を持つにふさわしく、武勲もさることながら、威圧的でまったく他人を寄せつけない雰囲気を漂わせている。怖いと思う分でも親しみを感じている者はいない。友達といえば同期同位のサウスぐらいだ。ある意味天職なのだろう。他者とは一線を画する頭脳の明晰さや身体能力の高さを誇り、先人からは羨望を、後輩からは憧憬を得ている。「恐怖のカリスマ」的存在である。

さつきは、この体格差やクールなイメージが邪魔をしていたせいでも気がつかなかつたのだ。サウスはなにげに眺めていて、不意に「あ！」と声を上げた。

「そーか、そーか」

などと一人納得しながら、ファウストに向かいに腰かける。ファウストは軽く首をかしげた。

「どうした？」

サウスはテーブルに腕をつき、やや身を乗り出した。

「いやな、今日入つて来た奴の中に妙に落ち着いたのがいて、誰かに似てんなーと思つてたんだよ」

「それで？」

「おまえにそつくりだ」

サウスに指差され、ファウストは眉尻をピクリと上げた。

「ほほう、どのあたりが？」

「自信ありげなところが」

「俺はそんなに自信ありげか」

「ありげだね。まあ実際、自信もつくだろ。満点でトップ合格だつたし

「へえ、そいつはスゴイな。いくつだ？」

「十五」

「……十、五？」

端正な眉目をひそめ、ファウストは持っていたフォークを置いた。

「段階系は？」

「アドサピリアと書いてあつたけどな？」

なぜか真剣に尋ねてくるファウストを不思議に思いながら、サウスは答えた。

「それが、どうかしたのか？」

聞いてみたが、ファウストはうつむき、暗い表情で視線を少し横に流しだけだった。サウスは頭をかきつつ席を離れ、バイキングへと向かつた。サラダを取る途中、ちらりとファウストをふり返ってみたが、相変わらず黙して動かない。（なんなんだ、いったい）

サウスは顔を戻し、チキンをトレーに乗せた。その際、ちょうど並んできたマチルダの腕を肘でつついた。

「よお、マチルダ」

「なによ」

「ファウストがおかしい」

「あら、あなたにそんなこと言われたら、彼は一度と立ち直れないわ」

「こらー、真面目に聞けよ」

「なんなのよ」

うつとうしそうに返されたが、サウスは気にせず言った。

「ほら、シルバー・クラウズ。今日入つて来た、かわい子ちゃん」

「それが？」

「そいつの話をしたら急に黙っちゃまって」

「なんで？」

「わからないから聞いてるんだろー？」

「どうして私に聞くのよー」

「彼女だろ？」

「彼女つたつて、まだ付き合い始めたばかりよ？　だいたいあの
人、あんまり自分のこと話さないし」

「ひとつくらい思い当たるこたーねえのかよ」

「うーん」

マチルダは人差し指を顎にあてて、あれこれと原因になりそうな
ことを考えた。そしてなにかに思い当たったような顔をした。

「そういえば彼、生き別れた弟、捜してなかつたかしら。たしかシ
ルバー・クラウズくらいの年頃よ？」

「あ」

サウスは思わず、自分の口を手でふさいだ。

（そつか、それでか。マズイな、そりやあ。弟と似たような歳で自
分にソックリなのが入つて来たなんて聞いたなら、そうじやないかと
期待するよな。ああ、なんてこつた。ただでさえシーランはブラコ
ンなのによー）

サウスが己の失言を悔いでいる時、シギルは新入隊員用の四人部
屋にある一段ベッド上段に寝そべつた。向かいの上段には、リベリ
ー地方「北大陸の東にある農村地帯」から来たラスク・エロル（十
四歳）が、その真下には地元グラウコス出身のルーク・リース（十
六歳）が、そしてシギルの下段にはディストール南部「南大陸最南
」育ちのゾイック・ランドン（十五歳）が入居した。ドアを開ける
と左右に配置されている一段ベッドのあいだは、わずか一メートル
の隙間しかない。寝る以外には用のない作りの部屋だ。

「みんなで食堂、行かないか？」

ルーク・リースが年長者らしく述べた。誰もがうなずき、もらつ
たパンフレットの施設案内地図を確認して食堂へ向かつた。上等兵
以下の者が利用できる食堂は一般食堂で、士官食堂は七メートル幅
の通路をはさんだ真向かいにある。双方とも出入口は白い金属製の
自動扉だ。収容人数は一般で五千人、士官で六十人。

「俺、トイレに寄つてく。先に行つてて」

途中、シギルは三人に言い置き、トイレに立ち寄った。そして遅れること約五分、ひとり一般食堂の自動扉を開けようとした、その時。

真向かいの士官食堂から出てくる一人の男を田にとめた。一人は陸軍大佐サウス・ウイビーン。もう一人は見たことのない士官だ。視力にも優れたシギルは次の瞬で、襟にある空軍大佐の記章を発見した。胸にある横に長方形の小さな金属プレートも見た。プレートには名前が刻印されており、そこには「ファウスト・ロスレイン」と、確かにある。シギルはとっさに目を伏せ、自動扉を開けて食堂へ駆け込んだ。

一方、そんなシギルに気づいていたサウスとファウストは、少し通路で立ち話をした。

「ほら、今のが満点トップ合格の奴。シルバー・クラウズ・ラインビル。かっこいいだろ？」「

勇猛果敢と誉めそやされているとは思えないほど、ゆるみきつた表情で語る友人を見て、ファウストは眉間に寄せた。

「見るからに、おまえの好みだな。規律第三十一条を言え」
サウスはとたんに暗くなつた。

「新入隊員との交際は禁ず」

「よく言えました。くれぐれも優秀な人材をダメにしないでくれよ」
これは、想像を絶するほど厳しい初頭訓練中に、本来なら恋愛どころではない立場の新入隊員が、たまにそういう状況におちいつて脱落していく者がいることを危惧し、作られた規律だ。一見くだらないが意外と重要なのだ。

「ようく肝に銘じておりますよ。なあに、たかが一年の辛抱じゃないか」「いか

「一年経つたら付き合いつつもりか？」

「ふられなければな」

「おまえなんか、ふられるぞ」

「ぐえつ。マチルダより容赦ねーな。しかーし！」

急に元気を盛り返し、サウスは声を張り上げた。

「実は何を隠そう、俺はあの子の尊敬的的なぞ。どうだい、脈ありな感じだろ?」

ファウストはしらけた様子で腕組みした。

「ほーお。それではせいぜい、この一年間は少年の持つ理想像を壊さんよろに生きることだな」

「うぐつ、貴様それでも友達か」

「さあ、どうだつたかな?」

含み笑いとともにサラリと黙って歩き出したファウストの背を、

サウスは追いかけるように歩を踏んだ。

「こらこら、待ちなさい、そこの戦友!」

その夜、シギルは眠れずにいた。初めて見る兄の姿が、まぶたに焼きついて消えないのだ。

(まいつたな、似てる。まあ、兄弟だから無理もないけど)
左に寝返りを打ち、壁をみつめる。シギルの瞳は不安に憂えた。
そのうち博士の作成した偽造IDのことが気になり出した。入隊試験の緊張から解放され、少し冷静になつたためともいえる。

翌日の昼休み。IDの詳細は調べておく必要があるだろうと、シギルは休憩所にあるパソコンで自分のデータを引き出し、閲覧した。休憩所にはフリーのカフェバーとカフェテラスがあり、脇にセパレーターで区切られたネット用のパソコンが置いてある。パソコンは、直径五センチの球体中央にあるレンズから発信される光が、四十五度角に設置されている二十インチ、○・○一ミリ幅の透明なディスプレイの背面に当たると、前面にパソコン画面として映るというタイプの最新機種だ。操作は画面に直接触れておこなう。

シギルは、外付けされているカードリーダーにIDカードを通した。

『氏名』シルバー・クラウズ・ラインビル。

『生年月日』一三七一年十月十八日。

『性別』男。

『出身地』フリューギア。

『血液型』B。

『人種』アドサピリア。

『詳細』クール・ケインズ・ラインビルとサラ・ビーンズ・ラインビル夫妻の間に生まれる。両親は一三八〇年没『

(なるほど。死んだ人間の忘れ形見つてことか。フリューギアなんて僻地もいいところだな。身寄りも友人もなく、ひつそり暮らしてい

た夫婦の子なら、まず本物かどうか確かめようがない。本当にライ
ンビル夫妻に子供が生まれたのがどうかさえ、誰も実証できない
シギルはウインドウを閉じ、システムを終了させ、イスを離れた。
その足でカフェバーへ向かい、セルフコーナーで紙コップにプラッ
クコーヒーをそそぐと、歩き出しながら飲み干した。空になつたコ
ップは六メートルも先にあるゴミ箱の中へと、正確に投げ入れられ
る。周囲は気がつかないが、これは念動力の賜物だ。

そんなシギルの行動を、少し離れた位置から眺めていた男が言つ
た。

「あれは誰だ」

男の名はブレッド・カーマル。二十七歳。黒髪に黒い瞳で、一九
四センチの長身だ。スタイルは抜群である。そして神秘的な甘いマ
スクが印象的だ。百人中百人が目を見張るほど完成された美があり、
人間離れしている。それは俳優やモデル並みの容姿であるファウス
トやシギルさえ比較ならないほどだ。長めに伸ばした前髪をおろし、
やや目元を隠してあるのは、目立ちすぎると気にしている内面の
表れである。だがそれさえも、美しさに彩りを添える一品だ。

テーブルをはさんで対面していたサウスは一瞬、緊張した面持ちで
答えた。

「昨日入つて来た少年です。シルバー・クラウズ・ラインビル、十
五歳。筆記も実地も満点でした」

マニュアルどおりの言い方をしておいて、再びボンヤリとする。
さきほどからブレッドにみとれていたのだ。

いかなる男女も、これは別物と言わしめるだけの気品と美貌。て
っぺんから爪先まで一点の曇りもない。もはや神懸かり的だ、と。
そんな彼の、次に目がいくのは制服である。軍服の上着丈は通常、
腿のあたりまでだが、彼の場合はスネまであり、色は瑠璃紺だ？？
それはすなわち將軍の証。グラウコスで將軍といえば、全七軍のト
ップに立つ者として知られている。つまり彼は將軍の將軍、大元帥
とか総帥とか言われたりする立場の人間なのである。

奔放な性格のサウスでも臆する相手だ。極度な緊張もする。しかしそれを押しても、たまに向かい合い雑談するのは、やはり一目千両以上の価値があるからだ。

サウスの説明を聞いて、ブレッドは顎をつまんだ。
「ああ、あいつか。なるほど。姿姿自体も目立つが、行動も派手なヤツだ。なんでも苦労せず、ひょうひょうとやつてのけるタイプだな。誰かに似ている」

「あなたが言いますか」とサウスは思いつつ、受け答えた。
「ファウスト・ロスライン」

即答だったので、ブレッドはわずかにサウスを凝視した。

「そうだ。まさしくファウスト・ロスラインだ。よく気がついたな？」

「そりや、わりと年中、一緒にいますから」

サウスの言葉に、ブレッドは穏やかな笑みを浮かべた。

「嫌か？」

「いえ、とんでもない。良き友であり、良い戦士だと思っています。まあ時々、劣等感はいだきますが」

「おまえのように優秀な男に劣等感をいだかせるとは、たいした男だ。すると、そんな人材がまた俺の手に入つたと考えていいのかな？」

「は、はい。そう考えてよろしいかと」

「そうか、しかし？」

ブレッドはテーブルに手をつき、立ち上がり際に言った。

「あの少年、要注意だな」

「えつ？」

サウスはブレッドの台詞を意外に思い、見上げた先に、将軍の顔を見た。

「思い過ごしならいいが、なんとなく、軍人の勘がそう言っている。優れたる者は宝だが、扱い方を間違えると足をすくわれる。目を光らせてくれ」

「……はい」

サウスは小さな声で返事をした。自分は別のことでの田をつけていたのだが、まさか將軍から直々に軍事的な目付役を命ぜられるとは思ってもみなかつたので、動搖した。

しかしそれからの一年は、シギルも連口のようにある初頭教育や訓練を受けていたので、忙しさにまぎれ、さして変わった様子もなく過ぎた。「やはり將軍の思い通りじじゃないだろうか」と口には出さないが、サウスは思った。

シルバーは優秀さを鼻にかけないうえに温厚な性格で、同僚に好かれている。落ちこぼれ気味の仲間を助ける知恵も持つていて、それが決して出しやばらない、さりげないフォローだったりするので、教官からも好評だ。間違つても人の足をすくうような人間ではなかつた。

親友と呼べる友もできたようだ。同室のルーク・リース。訓練中でも休暇中でも常に一緒に。なにか気が合うのだろう。サウスから見てその雰囲気は、まさにファウストと自分を見るようだった。
(それにしても)

サウスは腕組みをして、入隊当時より十センチほど背の伸びたシギルを、やや遠くから見つめた。シギルは一人で集団を離れ、休憩している。今日はルークとは訓練内容が別らしく、若干つまらなそうだ。

はじめは「ファウストに似ている」とみんなが噂していたが、意外と感情表現豊かで人当たりが良く、屈託なく笑う少年であることが判明した昨今では、誰も似ていると言わなくなつた。ただサウスだけは未だに「ファウストをずつと可愛くした感じだ」と言い張つてゐる。

(客観的に見ると、やつぱ似てんだよな。どことなく顔立ちが。他の空似とはよく言ったもんだ。まあどうにしろ、俺好みだからいーんだけどよ~)

などと、くだらないことを思つてゐると、グラウコス基地の門をくぐつた一台のジープが訓練場を横切つた。ジープは本来ならそのまま外来専用の駐車場へ向かうはずだが、不意に後方のジープがシギルのそばで停まり、中から亞麻色の髪の中年男が飛び降りた。中年男はタートルダヴ基地の空軍所属、ロイス・ハーベイ伍長、四十五歳である。

突然わきで停まり、ジープから降りて来た人物に、シギルは驚きと懐かしい喜びに、またたいた。

「ロイ？」

「まさか？まさか、こんなところで逢おうとは」

ロイスの顔にも、シギルと同様の感情が表れた。だがロイスは、おおげさに声を上げたりしなかつた。少年の胸のプレートに、自分の知る名が刻まれていなかつたからだ。

ロイス・ハーベイは、今でこそ軍隊で伍長などをやつているが、元GP創立者の一人である。もちろん軍に知られてはマズイ過去だ。さいわいGPメンバーである頃は「ロイ」という愛称でしか呼ばれておらず、顔もフルネームも公表されていなかつたので、入隊することができた。

彼が軍に入ったのは、GPに愛想をつかしたからにはほかならない。否、GP設立当初、彼の胸にはもつと高尚な目的があつたのだが、現GPの總統スカイフィールズが現れて以降、思うようにいかなくなつたから反旗をひるがえした、というほうがより正しい。今では初期メンバーのほとんどがGPを抜け、散り散りになつてしまつてゐる。

「ロイ、元気だつたんだね。うれしいよ」

シギルはまだ幼い子供のように、ロイスを見つめて微笑んだ。その笑顔でロイスはすぐに、シギルの心にわだかまる不安や淋しさに気がついた。なにしろ赤ん坊の頃から知つてゐる少年だ。ロイスとしては、我が子を見守るような心境だった。

「君のことが、ずっと気にかかつていて。ひとときも忘れたことは

なかつたよ」

ロイスは言い、懐から名刺を出した。

「なにか困ったことがあつたら、ここへ連絡してくれ。なんでも力になろう」

渡された名刺にはメールアドレスと携帯番号が印刷されている。シギルは素直につなぎいた。

「ありがとう。ロイス……伍長？ すこいな、伍長なんだ」「別に、大層なことはしていないんだがな。今日だけ単なる上官のおともだ」

そう告げると同時に、ジープの運転手から声がかかった。

「伍長、早く参りませんと」

「ああ、すまん」

ロイスは軽くふり返って答えた。

「それじゃあ……シルバー？ 私は一日ばかりいる予定だ。また逢おう」

「うん」

頬を紅潮させ、心からうれしそうに返事をするシギルの顔に、口

イスは悲しみを隠した笑顔を返した。

（こんなに純粋な子がセフィラとは……かわいそう）。運命とは残酷なものだ）

ロイスはジープに乗り込み、シギルに軽く手をふり、その場を去つた。シギルも軽く手をふり返した。するとジープが巻き上げる土埃の向こう側から、サウスが歩いて来た。

「ロイス・ハーべイ伍長と知り合いか？」

シギルはややギョッとして、軍人らしい敬礼をした。

「はい。小さい頃、よく面倒をみてもらっていました

「へえ」

顎をつまむサウスの顔を、シギルは眉をひそめて見つめた。ここ一年、見張られているとは感じていたものの、話しかけられるは初めてだったからだ。

少し緊張ぎみのシギルに、サウスは優しく微笑みかけた。

「どうだ？ 調子は。一ヶ月後には後輩が入ってくる。しつかりしないとな」

「はい。そうするつもりです」

「お、頼もしいな。おまえのように優秀な人間は、上面としても鼻が高い」

「ありがとうございます」

シギルは堅苦しく会釈する。「どうも、かなり距離を置かれているような」とサウスは頭をかいだ。

「あーそのー、なんだ、もうどこに就くか考えてあるのか？」

「一応。第一希望が陸で、次が海です」

サウスは意外そうに目を丸めた。

「へえ？ 筆頭に我が隊を選んでくれるとは、うれしいね。けど空は？ 興味ないのか？」

シギルは口を閉ざした。空にはファウストがいる、とは言えなかつた。弟だと名乗り出られないことだけでも苦痛であるのに、そのうえ同じ隊で頻繁に姿を目にしなければならないなんて状況は、地獄としか言いようがない。

そんなシギルの気持ちなど知る由もないサウスは、急に黙り込んでしまったシギルを、どう扱えばいいのか迷つた。

「えーっと、なにか、気に障つたかな？」

シギルはハツとし、うつむいた。

「いえ、別に。そろそろ休憩時間も終わりですので、失礼します」

一礼し、踵を返して同僚の群れの中へと戻るその後ろ姿を、サウスは呆然と見送つた。

「失礼します、か。まいったな。もしかして俺、嫌われた？」

グラウコス空軍基地内の管制塔は東西南北、北東・南東・北西・南西の八方にそれぞれあり、すべてを直線で結んだ中心に管制塔本部が構えられている。こうした空港設備が含まれる分だけ、陸軍や海軍に比べ敷地面積は約三倍もある。だが軍事会議など、もろもろの事務的な作業をおこなう施設は陸軍と共同である。将軍がブレッド・カーマルに代わってから、経費削減のため縮小されたのだ。

サウスはその日、情報処理室を訪れてファウストと出会った。

設置されているパソコンは、何世代か前のE-Lシートディスプレイ型デスクトップで、ワイヤレス式のキーボードとマウスで操作する。サウスなどは、わりにアナログ人間なので、最新モデルより、こちらのほうが使い勝手が良いと思っている。

室内に入ると、整然と並ぶ複数台のパソコンのうち一台が、やや暗めの室内に煌煌とした明かりを灯していた。ファウストが一人、パソコンのディスプレイに映し出された個人情報のデータベースを虚ろに見つめている。

「よう、なにしてるんだ？」

サウスの軽い挨拶に、ファウストは表情なく、ふり返った。

「調べものだ」

「弟か？」

ディスプレイを覗き込みながら、サウスは声を落とした。ファウストは微かなため息のあと、うなずいた。

「ああ。だが、それらしいのはな」

「なんていうか、まあ、なに言つても仕方ないけど、あれだよな。大変だよな。俺で力になれることなら、なんでもやるぜ？」

「しおらしいことを言うな。気味が悪い」

ファウストは苦笑して、再び画面に向かった。サウスも一緒につて、膨大な量のデータを上から下まで注意深く見てみたが、気に

かかる者はいない。

「俺が五歳の時だ。忘れられない」

不意にファウストが語りだした。左手をマウスに置いてはいるが、操作は止まっている。サウスは近くのイスを引き寄せて座った。

「弟はまだ生まれたばかりで、思えばあれが幸福の絶頂期だった。弟の名を自分がつけてやりたいんだと、ずいぶん母にねだって、生まれる前から必死に考えて、用意していた名前をつけたんだ」

「へえ。そんな話、初めて聞いたな。なんてつけたんだ？」

「シギル？？シギル・ロスレイン。いつも陽の当たる場所にいてほしいと、願いを込めた」

「そつか、いい名前だな」

「だが現実は、願いとは裏腹だ。俺は一ヶ月も、一緒に暮らしだらうか。街がテロの襲撃を受けて、俺の家にも爆弾が投げ込まれた。両親は即死。弟は居間に取り残された。その時は駆けつけた消防士に助けられたが、外で待っていた俺の手には渡されず、救急病院へ搬送された。あとを追つて病院を訪れる看護師がやつて来て、無傷だったから養護施設へまわされているはずだと言つた。でも言われた施設にはいなかつた。街中の病院、施設、預けられそうな場所は全部、捜した」

「いなかつたんだな」

ファウストは苦痛に顔をゆがませた。その胸の内にある怒りと哀しみを感じて、サウスはいたたまれない気持ちで一杯になった。世の中に、そんな理不尽があつていいはずはない。

「……こんなことを言うのは無責任だと叱責されそうだけど、諦めずに捜し続ければ、きっといつか見つかる。出逢える時がくるって、俺は思うぜ？」

言いながらファウストの肩を優しく、だが力強く叩く。その慰めは確かに無責任だと思いつつも、ファウストは得難い友のいることに感謝した。

「ああ、そうだな」

わずかに笑みを浮かべたファウストを見て安心したサウスは、腕組みをして眉をしかめ、声のトーンを上げた。

「しかし妙だな」

「なにが？」

唐突な態度に、ファウストはやや肩を引いた。するとサウスは人の顔を指さして言った。

「だつておまえ、ガキの頃からずっと捜しているんだろ？」

「ああ」

「軍人になつてから捜し始めたとしても、もつ七年経つている。今は十六歳前後のシーランの男の子つていうのを限定で捜して、いまだに見つからないなんて、ちょっと不思議だ」

「そんなことは、おまえに指摘されなくても俺だつて感じている。でもだからって、どうすればいい」

「うーん」

サウスは頭をかき、しばらく宙に手を泳がせた。最悪、生きてはいないのかも知れないと思うが、希望を捨てていなければ、ファウストを前にそんなことは言えない。あくまでも、どこかで生きていると想定して考へるしかないのだ。

首をひねったサウスは、ふと、

「お、こうじうのはどうだ？」

と指を鳴らした。

「シーランだけど、戸籍上はシーランとして暮らしていない」

ファウストは怪訝そうにサウスを見据えた。

「……それは、ちらつと見たこともあるが、少し無茶苦茶じゃないか？　乱暴すぎる」

「でも捜索範囲は広がる。段階は見た目じゃ判別しにくい。本人かもしくは育ての親だかが、ネオ・ゲノムならネオ・ゲノムと申告すれば、そのまま受理されるだろ？　よほどのことがないかぎり医学的な実証を求められもしないし、書類上の書き換えなんかどうにでもなる」

「しかし」

「ここまで捜していないんだ。手当たりしだい捜してみたって、無駄にやあならないだろ」

「おまえな」

たたみかけてくるサウスに、ファウストは沈痛な面持ちだった。
「万が一にもそうだとしよう。それで？ それらしいのを手当たりしだい血液検査するのか。人権侵害で訴えられるぞ」

サウスは一瞬ひるみ、氣弱に顔を上げた。

「訴訟はマズイな。立場上、非常に良くない。でも、それだけの価値があるかもしれない。俺は一度でいいから、おまえが本気で笑っている顔を見てみたいんだよ、ファウスト」

「俺はそんなに笑わないか？」

サウスは腕を広げて肩をすくめた。

「笑わないね」

深いため息が、二人のあいだで交わされた。

* * *

それから一ヶ月。基地は新入隊員を迎える、かつての新入隊員は第一志望、もしくは第二志望の隊へ上がる季節を迎えた。希望は毎年、成績順に優先して叶えられる。シギルは一度も成績を落とすことなくきたので行く先は決まったのも同然だ。

改めて一軍人となる者も、新しい仲間を迎える側も、この時ばかりは浮き足立つて、総本部前の広場にある電子掲示板に配属先が映し出されるのを待つた。だが今年は例年とは違った。掲示板の前の人だからからは、不審などよめきが上がった。誰よりそこにいて愕然としたのは、シギルだ。ほとんどの者が希望通りの隊に選ばれ、みなが二等兵であるのに対し、彼だけが希望を叶えられず、欄外に名を記されたのだ。

『次の者には以下の任務を命ずる

空軍伍長

シルバー・クラウズ・ラインビル』

シギルは、めまいがした。

(空軍伍長？　なにそれ。せめて上等兵にならないのかな？？いや、そんな問題じやないか)

気軽にふらふらと見学しにきたサウスも、これには我が目を疑つた。

(おいおい、うちの將軍は、なに考へてるんだ)

思いつきり飛び級出世したサウスやファウストでさえ、新入隊員からいきなり下士官にはなれなかつた。どんなに優秀であろうと、まずは一等兵、上等兵ときて下士官だ。

「おい、シルバー」

サウスは、青ざめて呆然としているシギルを見つけ、声をかけた。シギルは気がつかなかつた。一年経つても、どこかその名に馴染めないでいたのだ。

「シルバー」

一度目でハツとしたシギルは、泣きそうな顔でサウスを見た。サウスは驚きと同時にたまらない気持ちになつて、反射的にシギルの腕をつかむと、そのまま群衆から抜け、建物の中へと入つていった。

無人の休憩所で、サウスは暗い顔をしたシギルと向かい合い、座つた。

(さて、どうしたものかな)

サウスがほとほと困つていると、シギルのほうから口火を切つた。

「俺、將軍に嫌われているんでしようか」

「え！？　なんで」

「だつて、第一希望でも第一希望でもない空で、しかもいきなり伍長だなんて。潰してやうつって腹でもないかぎり、考えられない選択です」

(なーつ！？　なんつーマイナス思考…)

サウスは心中で叫び、額に冷や汗をかいた。

「ま、まさか。いくらなんでも、そりやないぜ。俺の知るかぎり、將軍はそんなことをするような男じやない。きっとおまえが優秀なんで期待してるんだ。第一、よく考えてみろ。ラツキーじやないか。いきなり出世」「ースだなんて」

するとシギルはギロリとサウスを睨んだ。

「他人事だと思つて。別に俺も、出世コースが嫌だとは言ひません。でも空だけは嫌だったんですね」

「どうして？」

ひどく命懸がいかないように問われ、シギルはムツとした。

「希望どおりの隊へ入れた人に、俺の気持ちなんか、わかりませんよね」

「あ、あのなー」

サウスはガックリとし、頭をかかえた。

「俺は力にならうとしているんだ、これでも。場合によつちや將軍に掛け合つてやってもいいと思ってだな」

「そんな、理由なんて言つたら、ますますダメだ。申し訳ありませんが丁重にお断りします」

サウスは若干興味をそそられて、そつけないシギルを熱く見つめた。

「気になるなー、その言い方。いつたい全体、空のどこが気に入らないんだ。たいていの人間が憧れてる。今は太古の昔と違つて、身長、体重にこだわらず、実力さえありや戦闘機に乗れる。Gの負担がかからないシステムだからな。まさか高所恐怖症つてわけでもないだろ？」「う」

シギルは、にがい表情を浮かべた。彼は高所恐怖症どころか、身ひとつで大気圏すれすれを飛行できる。いまさら戦闘機に乗つて飛んでみたいとかいうレベルではないのだ。

「俺は空に憧れを持つていませんし、戦闘機にも乗りたくありません。嫌だという理由がたとえもつともでも、大佐に打ち明ける気も

ありません。このことについて触れてまわられても困ります。所属するものは嫌ですが、それ自体が嫌いだというんじゃないじゃありませんから」「なんだそれ」

納得いかないといつて訳がわからないといったふうのサウスを置いて、シギルはスッと立つてイスを離れた。

「とにかく、決められたものは仕方ありません。したがいます」「お、おい

サウスは腕をのばしたが、去つていくシギルを追うにはおよばなかつた。少年を追うよりも将軍のもとへ行つて、今回の人事に対する真意を聞き出すほうが先決だと思われたからだ。

* * *

將軍室は四室に分かれていて、外部からの入口は第一室の報告室にのみある。残り三室は書斎、応接室、寝室となつていて、報告室からのみ出入り可能だ。

サウスが報告室の、銀色で重厚な金属製の自動ドアを開くと、奥のデスクに組んだ両足をかけ、イスの背もたれにふんぞり返つている若き將軍の姿が目に入った。偉そうというのではなく、単にくつろいでいるふうの彼は、プライベートビーチへ遊びに来ただけの皇太子さんながら、優雅に見える。

サウスは無言で近寄り、静かに立ち止まった。

「将軍、いつたい、どういうつもりです？」

問われたブレッドは、彼が来ることを予想していたように、ニッヒと笑つた。

「おまえも」「苦労なことだな、サウス。そのお人好しがいつか、首を絞めることにならなきやいいが

「質問に答えてください」

本当のところ、ひどく緊張していたが、サウスは平静をよそおつて言つた。ブレッドはデスクから足をおろし、黒い瞳を光らせた。

「あれは稀にみる逸材だ。即戦力になる。おまえの報告によると人柄も問題はないんだろう。それなら、さっさと士官クラスに上げてしまつたほうが得策だ。鉄は熱いうちに打てと言うだろ？俺たちは将来的に絶対と言つていいい確率で、GPと存続をかけて戦う。それはイコール、セファイラ戦だ。能力のある者はすぐにでも使えるようにしておきたい。しかし残念ながら陸も海も伍長の空きがない。かといって下級軍曹^{サージャント}より上に使えるのは、いくらなんでも早過ぎる。よつて空軍伍長に任命したと言つわけだ。なにか疑問でも？」

「つい昨日まで新入隊員だったんですよ？ 下を引っ張つていけるだけの力があるとは思えません」

「見込み違いなら降格させればいいだけだ。そう固く考えるな」

「本人が納得していません」

「では、本人に直接ここへ来るよう命じた。納得いくまで説明してやる」

サウスはいつとき言葉を失つて、口を開閉させた。

「かわいそそうじやないですか。俺でさえ、ここへ来るのは勇気がいります」

やつと返つてきたような台詞に、ブレッドはふと立ち上がりつてサウスへ歩み寄つた。背は高いほうであるサウスでも見上げるような長身で、その若さからは想像もつかないような功の仮面をかぶつている。おまけに、人間が想像しうる範囲を越えた美貌の持ち主だ。そんな見るからに近寄りがたい男が、一步踏み込まなくとも屈く位置で意地が悪そうに笑つた。後ろ手を組み、少しだけ上半身をかたむけ、耳元でささやく。

「同伴で来てやればいいじゃないか。特別に許可をやひつ」

(- % # & @)

サウスは目を白黒させつつ、あとずさりした。

ブレッド・カーマルは、ほかの基地の將軍に比べれば、歳も近く親しみやすいタイプなのだが、平和への理想や人格者としての思想が高い分、人に求めるものも厳しい。特に軍人となつた者には「相

応の覚悟を持ち、おのれの良心に忠義を尽くせ」と田頃から口うるさい。軍はじまつて以来の名将軍とうたわれるだけあって、兵士のしつけは完璧だ。それは彼の尊敬すべき点ではあるが、時にこの強靭な潔癖さが多く権力がらみの敵を作ることもある。

それにも関わらず、最大規模を誇るグラウコス基地に君臨し、地位をたもつて一見平然と暮らしていられるのは、そこらの人間では歯が立たない相手だからだ。その男が「あくまでも筋の通った人事」としていることに不服申立するのは、進んで地獄の扉を開けるのと同じと言える。「同伴なんて冗談じやない」と、サウスは身震いした。

「わかつた、わかりました！ もう、どうなつても知りませんよ…」ブレッドはスッと胸を張つた。

「結構。人事で一度や二度失敗したからといって、どうにかなる俺ではない」

やや低音の、張りのある声で断言をする。

(その自信はどこから来るんだ)

サウスは思つたが、おつかないので口には出さなかつた。そして、「では、ご成功をお祈りします。失礼いたしました」と敬礼して踵を返し、鬼のよつな早足で退室した。

シギルはロイス宛にメールを打っていた。読んだらすぐ消去するよとにと、あとがきを添えて。

『空軍の伍長に就任した。異例なことらしいので、みんな驚いている。俺自身、うまくやれるかどうか不安だ。なにより大佐の顔をまともには見られないだろうという気持ちがある。ここへ来る前に博士が、俺に兄がいると教えてくれた。ファウスト・ロスラインだ。ロイは知っていた？　今すぐにでもここを飛び出したい心境だけど当てはないし、よそで身を隠すのは限界がある。GPからは逃げてきただけなんだ。博士がどうしているかも心配だ。良ければ一度会いに来てほしい』

自室でメールを受け取り読み終えたロイスは、「会いに行く」とだけ返事して、シギルのメールとともに返信履歴を消去した。そのあと肩を落とし、頭をかかえてベッドに腰をおろすと、大きなため息をついた。

「なんてことだ。あのファウスト・ロスラインがシギルの？？運命のイタズラとしか思えんな」

ロイスは因縁に恐怖しつつも、翌々日に控えたシギルの就任式のため、すばやく行動を起こした。休暇をとり、グラウコス基地出席の希望を申し立て、宿泊施設に予約を入れたのだ。

もちろん上官からは嫌味を言われた。ロイスの所属するタートルダヴ基地でも就任式はあるのだ。グラウコスの就任式に行くということは、すなわち、タートルダヴの就任式には出ないということだ。いい顔をしてもらえないのは当然である。

しかしロイスは決して臆することなく、なんども頭を下げて懇願した。彼は彼なりにシギルへの罪悪感があり、また愛情を持つていたので、そうすることが苦ではなかった。

ラウ・コード博士の近況についても調べあげた。GP研究室爆発

事故の報道があつてから、今日に至るまでの、軍が入手し得た情報のすべてだ。

「研究所の爆発は何者かの襲撃によって引き起こされた事故である可能性が高い。軍ではテロリスト同士の抗争とみている。事故による火災でセファイラに関する研究データがほぼ消失。当日の被験者が在、不在は未確認。死亡説もささやかれているが、GP側が流したデマだろうと推測される。ラウ・コード博士はかろうじて脱出し、現在はGP本部に身を置いているものと思われる、か」

ロイスは眉をひそめた。

（シギルがグラウコス基地において、偽名でなんの問題もなく過ごし、そのうえ士官クラス入りを果たしたとなると、そこにはかなり信用のおける架空の戸籍が存在するはずだ。これは考えるまでもなく博士の根回しだろう。とすると爆発事故は抗争などではなく、博士がシギルを逃すために仕組んだものと推測するのが自然だな。本人も「逃げて来た」と言っている。??なんにしても、潜伏先にグラウコスを選んだのは正解だ。あそこの将軍はたぶん一番まともだからな。全軍のトップに立ち、権力も実力も充分に兼ね備えていながら、やつていることは、ほとんどボランティア活動……めずらしい男だ）

ロイスはおぼろげに、ブレッドの面影を思い浮かべた。たぐい稀なる美貌の人で、貧民街のストリート・チルドレンから軍人になつたということぐらいしか、彼に関する知識は持っていない。数多くの武勲も立てているが、ことにボランティア活動には熱心だ。考えれば考えるほど、得体の知れない奇麗な人間としか表現しようがないことに気づく。

そしてふと「ラウ博士は生きているのだろうか」という不吉な疑問を、胸の内でつぶやいた。こんな真似をして、あのスカイフューリズにバレていないと、どうしても信じられないのだ。

（もし万が一、ラウ博士がこの世にもういないとしたら？　とてもじゃないがシギルの耳には入れられない。実の父のように慕つてい

たんだ。そんなことになつたら、きっと精神のバランスを崩してしまつだろ？」百二十パーセントの正確さを誇る制御力をもつてしても、精神のおよぼす影響力は計り知れない。ひとたびバランスを失えば、きっと力を抑制しきれなくなる。とはいっても隠しきれるものではないだろうな。大佐がストッパーになればいいが）苦惱の色をにじませて、ロイスは窓に映る自分の顔を見つめた。

「命を懸けるか。おまえに、その覚悟はあるのか、ロイス・ハイベイ

イ」

自問し、目を伏せる。彼は答えを出せないまま、翌朝、グラウコス基地へと旅立つた。

* * *

空軍伍長に任命されたシギルは、士官棟に案内された。案内人は、なぜかサウスだ。

「地下の移動装置を使えば、陸海空、すべての士官棟に移動可能だ。記章とネームバッヂさえつけていや許可はいらない」

これからシギルの生活の拠点となる空軍の士官棟は南側に位置している。何層にも重ねた核シェルターの地下一階にあり、高級ホテル並みの広さと美しさ、そして設備が整っている。地下二階にはモノレールの原理を採用した水平移動のエレベーターが西側と東側にのびており、そこから陸海の士官棟へとそれぞれ移動できるのだ。距離にすれば遠いが、これを使えば五分で行き来できる。

「質問いいですか？」

「ん、なんでも聞いて」

「どうして大佐が自分の案内を？」

「それはね、俺から將軍にお願いしたからだよ」

サウスは、のんきな声でニヤニヤしながら答えた。シギルは不審

そうに、その顔を覗き込んだ。

「どうして」

「あれ、つれないなー。一年前に告白したの、忘れちゃったの？」

「哀しいなあ」

「ふざけていただけじゃ」

「ないよ。俺はいつでも本気さあ

とても本気とは思えない軽い口調だが、たぶん本気なんだらうと、シギルは沈痛な面持ちで眉間に寄せた。

「大佐とお付き合いをして、なにかいいことがありますか？」

「お、いい質問だな。もちろんあるさ。伊達に陸軍大佐を務めちゃいない。おまえの権限がおよばないとこりもフォローできるし、なにかあってもバックアップできる。一応、あっちにも自信があるぜ？」

「……」

「どう？　付き合つ氣になつた？」

「いや、聞いてみただけですから。まったくその氣はありません」

「んなーつ！　冷たいつ。冷たすぎるぜ、ベイビー！」

周囲のことなどお構いなしにサウスが絶叫するので、部屋で休んでいた一人の士官が通路に出てきた。

「んだよ、サウスか。うつせーぞ！」

空軍少将のディモンズ・バーンである。寝癖だらけの赤毛に黒目で、身長は一七八センチ。容姿は可もなく不可もない。三十一歳独身だ。いつも無精髭を生やしている。ファウストほどの活躍はないが、指導力を買われて少将の地位にある。が、本人曰く「ファウストを早く上げる。奴の上に立つのは向いてねえ」とのこと。

所属が違うとはいえ、彼はサウスの上司もある。しかしサウスは思い切りタメ口を叩いた。

「こらえろ！　俺は今、とおつても傷心ボーイなんだよお～

グラウコスの鷹と恐れられているファウストと平気で親友付き合いでいる男だ。上司だろうがなんだろうがお構いない。上下関係という言葉をまったく無視して生きている。怖い者知らずの子供のようであり、生まれつき無礼者とも言える。そんなサウスが敬意を

払うのは、カーマル将軍だけだ。それを知つてはいても、ディモンズにもプライドがある。おまけに睡眠をさまたげられているので、軽くキレた。

「ああっ！？ てめ、頭打つたか！」

初日から問題を起こしたくないシギルは、慌ててサウスを制した。「大佐！」

これを見たディモンズは声を上げ、シギルを指差した。

「あーっ、おまえはつ、噂のユーフェイスだな！ よく来た！ 空へようこそ！」

すると少将の声に反応して、ほかの士官たちも次々と部屋から顔を覗かせた。

「なにっ、ラインビル？」

「おーっ、来たか。どれどれ」

「よーお。空へようこそ！」

「空へようこそ！」

みな満面の笑顔。

シギル・ロスレイン、もとい、シルバー・クラウズ・ラインビル十六歳は、本人が思うよりも友好的に迎え入れられたことに驚いた。そして、和気あいあいとしたムードにやや圧倒されつつも、頬をわずかに紅潮させ、照れくさそうに一礼した。

「よろしくお願いします」

* * *

「あれは、なかなかカワイイな。女性陣に大人気なのは勿論だが、士官のウケも上々だ」

人が混み合っている就任式会場の広場で、ルーヴ・サーヴァル・メイレン空軍中佐を相手に、シギルを指してディモンズは言った。すると東洋系の切れ長の目をわずかにまたたかせ、メイレンは釈然としない面持ちでまっすぐ前を見据えた。

「カワイイですかね？ 自分には脅威です」

「ん？ そうか？」

「そうですよ。ロスレイン大佐を思わせるよつた優秀さに加えて、前代未聞の最年少士官。明日にでも自分の上官になりそうな勢いだ。怖いですね」

「はつはつは。そりや考えすぎだ。たとえいつか上官になる日が訪れるにしても、五、六年は先だろ？」「

「明日も五年も同じです。ロスレイン大佐が大将になる頃は彼が中将だと、みんなが噂しているのをご存知ですか？」

「ほう、初耳だ」

「自分は情けないです」

「なんだ、くやしいのか」

「もちろんです。入隊当初から大佐について行こうと決めて、死ぬような努力を重ね、やつとここまで来たんですよ？」

「努力でどうにかなったんだから、たいしたものだ。奴がおまえを必要としていることに変わりはなかろう。別にそんなピッタリくつついでかなくてもいいじゃないか」

「自分は片腕になりたいんです」

「ふうん、奴も好かれたものだな」

ディモンズは人差し指で鼻をかきつつ、遠目にファウストの姿を眺めた。

一方、シギルは昨日まで同室だった三人の仲間達に取り囲まれ、祝福されていた。ひとつ年下のラスクは海軍に、同じ年のゾイックとひとつ上のルークは陸軍に入った。みん真新しい深緑の制服に身を包んでいる。

シギルは「自分もその制服を着てみたかったな」と思つたが、言わなかつた。エリートコースに進んだ者が口になると嫌味になるとわかっているからだ。だが「みんなと同じ」であることに憧れていった少年にとつてそれは、やはり妬ましいことだつた。

「せめてセフィラでなかつたら」と思つてしまふのだ。

シーランがセフィラになるには、数億万分の一のシーランしか保有していないという覚醒遺伝子「ナノクロス」が必要だ。しかしこのナノクロスは生後五年間が経過すると自然消滅してしまう。つまり、五歳の誕生日を迎えるまでにナノクロスがテレキネシス遺伝子「セフィラ」にショックを与えないければ、セフィラにはならないということだ。

また覚醒しても、衝撃に耐えられない個体は死んでしまう。よつて、すべての条件をクリアした完全体は非常にめずらしい。皆無と言つても過言ではないだろう。シギルは、そんなものになつてしまつた身の上が、時々ひどく憎らしく思えるのだ。

「いーなあ、黒い制服。よく似合つていいよ。かつこいい」ゾイックは、生地も仕立ても良く、見た目も高級感があるデザインの士官服を、心底うらやましがつて褒めた。着ている本人が気に入つてゐるかいないかは、このさい関係ない。

「ありがとう」

「士官棟つて個室なのか?」

ルークが尋ねた。

「うん」

「俺たちは三人部屋だぜ」

「へえ、どんな感じ?」

「うーん、四人から三人になつただけでも少し広いんだけどさ。なんて言うか、あまり代わり映えしないよ」

「そなんだ」

そう答えた時、開会式の鐘がなつた。四人は別れ、それぞれの立ち位置へと散らばる。シギルはその途中でロイスに会つた。というより腕をつかまれ、引き止められた。

「ロイ!」

まさか就任式に来るのは思つていなかつたらしく、目を丸めて自分をみつめるシギルに、ロイスは優しく微笑みかけた。

「まずは、おめでとう。同じ空軍伍長だ。わからないことは遠慮なく聞いてくれ」

シギルは、うれしそうに瞳を輝かせた。

「ありがとう」

「また後で話そう。そ、早く位置について」

「うん」

手をふって去るシギルを、目を細めて見送ったロイスは、広場の前面に設置された大きなステージに各士官の顔ぶれがそろいつつあるのを眺めた。右手に海軍、中央に陸軍、そして左手に空軍士官の席が用意されている。ロイスはその中にファウスト・ロスレインを見つけて、ハッとした。

(まずい、よく似ている)

まだ幼さを残している内はいいが、成長とともに兄に似てくるのではないか、と危惧していた彼は、こめかみにひと筋の汗を伝わせた。鉄のようにクールなイメージの強いファウストに比べ、シギルは春の日差しのように温和で愛想がいい。一見まったく正反対だからといって、これが同じタイプだつたら……と考えて、ロイスはぞっとした。

そのロイスの肩を、後ろから誰かが軽く叩いた。ふり返ると、サウス・ウェイビーン陸軍大佐の顔があつた。

「ハーベイ伍長もどうぞステージ側からご参加ください」

ロイスは慌てて敬礼した。

「いえ、自分は勝手に参加を申し出た身であります。許可をいただけただけでも感謝しております。お気づかいなく」

「んな遠慮するなつて。シルバーの晴れ姿、見に来たんだろ？ せ

つかくなんだから特等席で見なきや」

「ツと笑うサウスを、ロイスは目をしばたかせて見つめた。

「あの、あの子がなにか言つていましたか」

「ああ、小さい頃、世話んなつたつて」

「そ、そうですか」

ロイスは頭に手をあてつつ、恐縮しながらサウスに先導され、ステージの席へと着いた。就任式は、おこそかな中にも華やかで楽しい雰囲気を漂わせながら、つつがなく進行していった。将軍のスピーチがあり、記章の授与式に移る。

新入隊員であつた者は、所属ごとの記章と、まだ訓練生であることを示す赤いピンバッヂを受け取り、シギルは空軍の記章と伍長の記章を受け取つた。今回、士官クラスで移動があつたのはシギルだけなので、その注目度は高く、少年にはかなりのプレッシャーだろうと思われる。

ロイスは、シギルが就任の挨拶をする場面で思わず泣けてきてしまい、ハンカチを取り出して涙をぬぐつた。

（シギル、君の運命は過酷だ。たとえ今は軍人として人並みに生きられたとしても、セフィイラという名を背負い続けるかぎり、永遠に平穀な日々が訪れるではない。だが私は知つていて。君が誰よりも平和を望んでいることを。君の心がどんなに純粹であるかを。私はひどい男だな。セフィイラが君であることを、心のどこかで良かつたと思つていて。君ならその力を人間の恐怖に変えないと……私は君の幸福よりも、地上に生きる自分の身を案じている）

隣に着席していたグラウコスの空軍曹シリング・カーター（三十六歳）が、ロイスの背を軽く叩いた。感涙しているロイスを気づかつて慰めたのだ。シリングに、ロイスの涙に隠された本当の意味を探ることはできない。だが彼の手は、今のロイスには有り難かつた。

わざわざ自分が所属している基地の就任式を蹴つてまでやつて来て、シギルの就任挨拶に涙したロイスは、グラウコスでちょっとした話題になつた。

「ラインビル伍長は、いろんな人間に愛されているようだな」
基地内のカフェテラスで一服しながら、ファウストは親友のサウスに向かつて他人事のように話しかけた。

「カワイイからな」

受け答えるサウスものんきである。

「いや、それはおまえの見解だろう。俺は一般的な意見を聞きたいんだ」

「えーっ、だつて、おまえんとこの少将もカワイイって言つてたぜ？」

「コーヒーをかき混ぜていたスプーンの先を向け、サウスは声を上げた。が、

「少将が言うカワイイと、おまえの言つカワイイとは違うだろ」「と言われると、とたんに覇気をなくして再びカップにスプーンを突っ込み、かき回した。

「まあな」

「あのロイス・ハーベイ伍長というのは、ラインビルのなんだ」

「さあ、昔なじみとしか聞いてないな。小さい頃、世話をしたって」「

「そういえば、ラインビルは孤児だつたな」

「ああ。早く両親を亡くしている。かわいそうだな」

「今時めずらしくない。おまえにかわいそだと言われるほうが、かわいそうだ」

「この野郎」

口の減らない友人に悪態をついてやろうとした時、サウスはふと、視界の端にシギルの姿をとめた。彼は唐突に立ち上がり、大きく手

をふつた。

「おーい！ シルバー！」

シギルが気づいて、こちらに進行方向を変えたのを確認すると、サウスはイスに腰かけなおして、にやにや笑つた。

「噂をすれば、だな」

サウスと向かい合つていたファウストは、なにげにゆっくりと、かえりみた。すると、こちらへ向かつて来つつあつたシギルの足が不意に止まり、急に背を向けて走り出しだので、陥しく眉をしかめた。

「おい、逃げたぞ？」

「えつ！？」

サウスはテーブルに手をつき、イスをならして立ち上がった。

「な、なんで？」

「知るか」

？明らかに自分を見て逃げた？？？そう感じたファウストは姿勢を戻すと、コーヒーをいっきに飲み干した。

「おい、サウス」

「あ？」

「あとでひつ捕まえて、なんで逃げたのか聞いておけ」

「お？」

「立腹の様子と見て、サウスは驚いた。

（こんなことで怒るなんて、らしくねーな。さすがのファウスト様も人気者に嫌われるのはイヤなのかねえ……はは、まさかね）

サウスと別れたファウストは、その足でマチルダとの待ち合わせ場所へ行つた。軍のレジヤー施設内にある広い公園だ。人工的だが涼しげな木々が立ち並ぶ、美しい園だ。日々軍事にたずさわる者が心の安らぎを求める、憩いの場である。

ファウストとマチルダは、その一角の人目につかないベンチへ腰かけた。付き合い始めて一年が経つた。次の休日には彼女の両親と

挨拶を交わし、食事をする予定で、今日はその打ち合わせといったところだ。

「ハハハ」とでもないと基地の外に出るとはないから、思いつきり楽しめる場所がいいわ

とマチルダは言つたが、ファウストは乗り気でない。

「大事な挨拶なんだし、相応の場所つてものがあるだひつ」

「父は、私の好きなところでいひつて言つてくれたわ」

「そうかも知れないが、俺の体面も考えてくれ」

「固いのね」

「そういう問題じやない。心証を良くしたいんだ。特に君の父親は、所属が違うとはいえ上司でトップだ。内でも外でも、こいつちは常に評価される側だ」

マチルダは頬に手をあて、うーんと唸つた。

「まあ、それもそつだけど、あなたつて優秀でしょ？　これといった欠点もないし、むしろ長所しか見えないのよね。あんまり完璧より少し崩したほうがいいんじゃないから。そのほうが人間らしいわ」

ファウストはしばらく無言でマチルダをみつめた。

「俺は人間らしくないか？」

「あら、やだ。悪い意味にとらないでね。ただ打ち解けやすくしたいのよ。これでも私、あなたに気をつかつてないわけじゃないのよ」

ファウストは肩で軽く息をついて微笑んだ。

「わかった。君の好きな場所でいいよ」

それを受けて、マチルダも微笑んだ。

「ありがとう。でも、うれしいわ。あなたが私の両親に良く思われたいって思つててくれて」

「当然じゃないか。俺は君を愛してる」

「私もあなたを愛してるわ」

二人は自然と包容を交わし、キスをした。幸福を感じる脳裏でファウストは、これまで逃れることのできなかつた弟の影をほんの一

瞬だけ忘れた。そのことが後から悲しく思えて、夜も眠れないほど苦しんだ。

* * *

翌日のこと。サウスは友人の注文どおり、空軍士官棟内のミーティングルームでシギルを捕まえた。

「おまえ、なんであそこで逃げるの？ ファウスト怒つてたぜ？」
捕まえた理由を告げるとシギルは青ざめた。

「えつ、怒つてた？」

「ああ。だつて、ファウストの顔見て逃げただろ」

「すみません。つい条件反射で」

「は？」

「俺、あの人、どうも怖くて」

口ではそう言いつつ、シギルは「しまつたなあ」と胸の内でつぶやいた。本当は逃げるつもりなどなかつたが、隠していることへのうしろめたさや、兄を慕つ心のはやりに負けて、逃げてしまったのだ。

サウスは呆気にとられて、シギルの胸元を指差した。

「もしかして、空に行きたくないつづつてたの、ファウストが怖いから？」

シギルは素直にうなずいた。すると数秒の沈黙のあとで、サウスが「ふつ」と吹き出した。

「わつはつはつ！」

「なつ、なにがおかしいんですか！」

「ひいーひつひつ。だつてよー、なんかツボにハマりすぎでんだけ。あつはつはつ。ファウストが怖いから嫌、か。すっげえカワイイつ。いかすよ、その理由！ 稀代の優等生が、ファウスト怖いつてか。高所恐怖症ならぬファウスト恐怖症？ あー、もうダメだ。おまえに逃げられた時のファウストの顔、思い出しちまつた。ぎゅ

ははははは！」

涙を浮かべてまで笑うサウスを前に、シギルは耳まで真っ赤にして顔をほてらせた。

「もう！　いいかげんにしてください。言わなきゃよかったです。笑うな！」

「ぎやあつはつはつはつはー……ああ、でもよお、ファウストの友人としてフォローすつけど、あいつが怖えのは仕事ん時だけ。本当は優しい、いい奴なんだ。みんな、ちょっと誤解してるけど。まあ、俺が言つてもピンとこないだらうけどな。一緒に仕事してりやあ、おまえもいつか分かる時がくるよ」

シギルはあえて何も返さなかつたが、彼のフォローを心密かに喜んだ。自分にとつては若干迷惑な男だが、兄にとつては確かにかけがえのない友人だと……一人のめぐり合わせを、ひとまず神に感謝しておこなつと思つた。

ところで、このHピソードは即基地内に広まつて、『シルバーフィフティ』ぱりカワイイね事件と名付けられた。もちろん名付け親はサウスだ。しかしこの噂話を聞いて、一人だけ笑わなかつた人物がいた。当人のファウストと、ブレッド・カーマル将軍である。ブレッド曰く、

「空に行きたくない理由としては、むしろ出来すぎている」

だが本格的に今期の訓練が始まつてしまつと、怖いだとかなんだとか言つてはいられない。所属が同じ士官同士は否が応でも顔を合わせなければならぬ。事件の噂のおかげでファウストは目も合わせないが、シギルは姿を見かけるだけで、悲哀に押しつぶされそつだつた。

就任式後、休日をはさんで、明くる訓練初日。

空軍管轄訓練場内では、士官指導のもと、新しく配属された二等兵の飛行訓練がおこなわれることになった。「士官クラスの者が主エンジンを操作。訓練生を乗せて飛び、実際の飛行を体験させる」という実地訓練だ。

シギルは下士官だが、戦闘機に乗つたことはないので、訓練生に混ざる。

「君の訓練は私が受け持つよ」

とシリング・カーター軍曹が言った。

黒々とした短髪。奥二重の黒い瞳は垂れ目で、どこから見ても優しそうなおじさんという印象の軍曹だ。

シギルは頭を下げた。

「よろしくお願ひします」

訓練生は担当してもういちど士官の前に整列し、小型通信機を耳に装着した。管制塔からの指示や、士官の指示を聞き取るためだ。

「君たちは乗つていいだけだから気楽にね。といつても、少しは操縦テクニックを盗んでもらわないと困るんだけど」

一十八歳の女性士官シエラ・ハーネスト空軍准尉が冗談めかして言つと、緊張していた訓練生の顔に少し笑みがこぼれた。物腰の柔らかさは女性ならではだ。場を和らげる言葉選びに関しては慣れているようである。

ひと通りの説明が終わると、みなは機へ順に乗り込み、次々と離陸した。シギルも同様にして指導士官のとなりに乗り込むと、氣を引き締めた。

「空を飛ぶのは初めて?」

シリングがなにか、そんな質問をした。ある意味、初めてであるはずがないシギルだが、そこはうなずいた。

「楽しいぞ、空は」

シリングの励ましが聞こえたかと思うと同時に、戦闘機は走り出した。順調に離陸。決められたコースをたどり、あとは着陸するだけだ。正味十五分の飛行。

が、急にシリングが、やや緊迫した面持ちで通信機のボタンに手を伸ばした。

「F305号機、主エンジンの操縦レバーに警告ランプが点滅。管制塔に指示を仰ぐ」

？こちら管制塔、操縦可能な方位を示してください？

シリングはゆっくりとレバーを動かしていくが、中位置で止めて、再び管制塔に指示をあおいだ。

「全方向、操縦不能。オートシステム反応なし。予備は異常なし」「緊急用オートシステムにパスコードを入力して下さい？」

シリングは指示にしたがって、反応のないオートシステムを切り捨て、緊急用のシステムを起動させた。これがうまく作動すれば、機は練習コースを自動で飛行し、着陸まで完璧におこなってくれる。訓練機ではなく、となりに座っているのが初搭乗の訓練生でなければ、副操縦桿を動かすところだが、まるで条件を備えてないので、やむを得ない。

シリングはシギルと目を合わせると、かすかに口角を上げた。不安にさせまいと無理に笑顔を作っているようだ。

「こんなことは、めったにないんだがな」

と言いながら、黄色いボタンを押す。

「緊急用システム、正常に作動。加速装置にエラーのサインが表示されている」

？加速装置ですか？ 着陸後、ただちに整備班を向かわせます？

「了解」

管制塔とのやり取りが終了すると、シリングはホツとして座席に身を預けた。が、それまで様子をうかがっていたシギルが、ふとシリングの袖をつかんだ。

「軍曹、スピードが上がっています」

「なに！？」

メーターを見たシリングは、顔面を硬直させた。一秒に〇・五キロ加速している。前方を見ると、前に飛び立った機が迫っていた。

シギルはとつさに叫んだ。

「サブに切り替えます！」

サブとは副操縦員のことで、この場合、メインの操縦を完全に副操縦に切り替え、操縦士がシギルに移ることを意味している。さきほどシリングがあえて避けた手段だ。当然シギルには操縦経験などないが、そんなことを言っている場合ではない。

シギルは素早くサブに切り替えると、操縦桿を握った。それと同時に十メートル前方に迫っていた前号機を避け、その横わずか三メートルの距離をかすめて通り過ぎた。この瞬間を、管制塔員や地上に待機していた者は、固唾をのんで見守っていた。ヒツと息をつまらせた者もいる。

その一分も経たぬ間に、速度は人間の動体視力限界の値を示した。コースを行くすべての機が、あつという間に前方に迫る。しかしシギルの操縦する機は、左右に華麗ともいえる格好で回転し、ことごとくこれを避けた。

事態の深刻さを知らない第三者がみれば、アクロバット飛行ショーでも、おこなわれているのかと思うほどだ。

「管制塔！ F305号機はこのまま、いつたんコースを抜けます
！ 許可をください！」

シギルの声に、管制塔は慌てて応えた。

？ ラジヤー！？

許可がおりると同時に、F305号機はコースをはずれた。するとまたシギルから、管制塔に連絡が入った。

「加速装置の機能を回復してください！」

？ そ、それは無理です！ 直接機内を調査してみないと何は？

「加速装置はシステムホールドのようです！」

?えつ、え??

「機とつながっているシステムにアクセスしてくださいー!」
?ど、どうやって……?

「ターミナルから、センターパスワード画面を呼び出して、今から
いう「コードを入力してください!」

?は、はい!?

「H1093A5612#0012001Y31-3612OP9
61WWBO!」

?…………う、打ち込みました!?

「次、F305G100SCONTROL!」

?…………アクセス画面が開きました!?
「エディットを選択してプロバインディングの再構築をしたあと、
診断と修復のコマンドを入力してください!」

言われるまま管制塔員が打ち込むと、F305号機の加速装置工
ラーは、あっけなく解除され、修復された。同時にスピードは徐々
に弱まり、通常運行レベルまでダウン。

シギルは大きく肩を揺らし、何度も深呼吸した。額には小さな汗
の粒が無数に浮いている。的確で冷静な対処をし、大業を余裕で成
し遂げたようでも、本人は無我夢中で、いっぱいいっぱいだつたの
だ。

シリングはその様子をのちに仲間に語り、少年の勇気を褒めながら、ついでに自分の不甲斐なさを反省した。

シリングは言った。

「すまない。私がしなければならないことを

シギルは唾をのみ込んで呼吸を落ち着かせ、額の汗をぬぐいつつ
微笑んだ。

「いえ、軍曹と乗つてなかつたら、たぶんパニックになつて、こん
なにうまく切り抜けられなかつたと思います」

二人は和やかに笑みを交わすと、ひと呼吸おいて管制塔と連絡を
とつた。

「今から着陸態勢に入ります。誘導お願ひします」

?ラ、ラジャー!?

管制塔からは深い安堵のため息と、明るい歓声が響いた。また、この一連のやりとりを逐一聞き、超人的な操縦を目の当たりにした士官や訓練生一同は、舌を巻いて絶句した。

「ターミナルからセンターパスワード画面を開いて戦闘機のシステムにアクセスする」などというのは、管制塔に長年勤めている者ですらしたことがない非常な行為だ。それをアッサリ指示してのけた度胸は並ではない。もはや「どうして第一希望に空を選んでなかつたのか不思議なくらい」だった。異例の出世を果たしたのも納得である。

いくら優秀といつても、いきなり伍長に就任した少年に不信感をいだき、内心で嫉妬していた士官や同期生はいた。だが、そんなわだかまりは彼らの中から今の一瞬で吹き飛んでしまったのだ。

「お、驚いたな。本当に初心者か?」

横で啞然と、口を開けたまま空を見上げているディモンズ・バーン少将の問いに、ファウストも驚きを隠せない様子で返答した。

「俺が、知るか」

翌日。

シギルは新入隊員寮と陸軍兵一般寮の境にある屋外通路を横切って、ルーク・リースに会つた。ルークは見知らぬ新入隊員の少女と談笑しており、声をかけるのはためらわれたが、無視するのも妙なので、結局あいさつした。

「やあ、ルーク」

するとルークは軽く敬礼し、「お疲れさまです」と言った。同期で親友であつても、もう立場が違つのだ。それがシギルには少し寂しかつた。

「ほら、おまえも敬礼しろ。話しただろ？ 空軍伍長のシルバー・

クラウズ・ラインビルだ」

ルークは傍らにいた少女を肘でつついた。少女は栗毛に大きな鳶色の瞳で、可愛らしい顔立ちをしている。美少女と言つていい。急に緊張した面持ちで敬礼する様子も初々しく、シギルは胸がくすぐつたくなつた。

「伍長、妹のマテリーンです。よろしくお願ひします」

ルークの紹介に、シギルは目を見張つた。

「妹、いたの？」

「はい。実は去年、一緒に入隊試験を受けたんですが、自分だけ合格しまして」

「今年は受かったんだ。良かつたね」

シギルが言つて微笑みかけると、マテリーンは顔を真つ赤にした。

「はい」

その肩に、ルークが優しく手をのせる。

「俺たちシー・ランだから、この一年、離れているのは結構きつかつたんですけど、ほんと良かつたです。もし今年もダメだったら、俺も辞めるしかなかつたし」

思わずこのころでのルークの告白に、シギルは衝撃を受け、深く傷ついた。ルークがシー・ランであることを知らなかつたことはさておいても、邪氣のない台詞に悪意を感じたのだ。

統計上、シー・ランの兄弟を引き離していられるのは短くて三年、長くて二十年だと言われている。それを越えると精神に深刻な影響を与えるからだ。どういう形で、また何年で出るかは個人差があるようだが、なんにしてもロスレイン兄弟はギリギリである。シギルとしては、兄が心配だった。

（俺たちは何故、この兄妹のようにしていられないんだろう）

答えの出ている問いを心の中で反復してみると、軽いめまいに襲われた。

十六年経つた今でも弟を捜している兄。去年までそんな兄がいる

ことも知らずに過ごしていた弟。再会した今でも視線を交わすことがない兄弟。同じ兄弟を持つシーランでりながら、なんという違いだろうか？？と。

（どうして俺は、セフィラなんだ）

シギルは腕が震えそうなのをおさえようとして、グッと拳を握った。その顔からは笑みが消え、瞳からは輝きが失われた。

兄弟姉妹で軍隊に勤めているシーランは多い。なにもルークが特別なのではない。それでもシギルの心は軋んで、居たたまれなくなってしまったのだ。

表情が一変して暗く沈んだシギルを見て、ルークは少しだけ困惑した。気に障るようなことをした覚えはない。あつたとしても、シギルなら怒つたりしないと知っているからだ。それほどシギルは普段から温厚だった。まして潔白なルークにしてみれば、ここで嫌な顔をされる筋合いはないわけで、通常なら冗談口調で文句のひとつも言つてやるところだ。が、いまや上司であり、前例がないだけに対処法がわからないでいた。

気まずいなと思つていると、わずかに我に返つた感で、シギルが言つた。

「とにかく合格したんだ。良かつたじゃないか。これからも、がんばって」

それは、そつけなく淡々とした口調だった。

「それじゃあ」

と会話を打ち切るシギルの視線は、もう兄妹を見ていない。二人のわきを通り過ぎ、空軍士官僚のある方角へと去つて行く。その場に残されたマデリーンは、兄ルークに向かつて言つた。

「聞いているより、冷たい感じの人ね」

ルークは眉をひそめながら、肩をすくめた。

「いや、いつもはもっと愛想がいいし優しいよ。今日は珍しく虫の居所が悪かつたんじゃないかな」

* * *

午後六時。

夕食を終え、食堂を出たルークがマデリーンと楽しげに歩いていると、向かいからやつて来たサウスに止められた。

「お、交際は禁止だぞう？」

ルークは、相変わらず上司らしくないサウスを見上げて顔を引きつらせ、笑つた。

「妹のマデリーンです、大佐」

サウスは、とたんにそっぽを向く。

「なんだ、おもしろくない」

「大佐！」

不埒な上司をたしなめるべく、ルークは声を上げた。しかし、そんなことに動じるはずもないサウスは、ふと真面目な顔で話題を変えた。

「おまえ、確かシーランだつたな」

「はい」

「うーん、あんま顔合わせる」たないだらけどなあ……」

「はい？」

「空軍大佐のファウスト・ロスレインは、知つてんだろ？」

「はい」

「間違つても、そいつの前で可愛い妹の自慢とかするなよ」

ルークはキヨトンとした。

「なぜですか？」

「ファウストもシーランだ。生き別れた弟を捜して、もう十六年だ。

その心中を想うとな。わかるだろ？」

「あ」

ルークは、隣で聞いていた妹とともに息をつまらせた。視線を交わし合う二人の視線は、せつない。ネオ・ゲノムのサウスには共感できない世界が、そこにはある。

シーランにとって兄弟姉妹を失うことは、誰のことでも他人事ではないのだ。いつか自分も直面する苦痛である。まして十代や二十代の若さで経験してしまつとしたら、それは生きる希望すら失つてしまつ悲劇である。

（そつか。ロスレイン大佐があんなふうなのは、弟のことがあるからなんだ。つらいだろうな。俺もマデリーンを失つてしまつたら、きっと同じように心を閉ざして……いや、とても生きていられないんじやないかな）

ルークはそう思つ一方で、昼間のシギルを思い出していた。どうして思い出したりしたのか分からなかつたが、らしくない彼の態度が小さなトゲとなつて胸にひつかつたのだ。

（なんだろう、この感じ。変だな。なんだか、とても苦しい）

兄妹を沈黙させてしまつたサウスは気持ち立ち去りづらくなり、助けを求めるように兄ルークを見た。が、それはすぐ後悔に変わつた。

「んなつ、おまえつ、なに泣いてんだよ！ まるで俺が泣かしたみたいじやねつかよー」

ルークの両目からは涙が流れ落ちている。指摘されて横から兄を覗いたマデリーンも、さすがに驚いた様子で「大丈夫？」と声をかけた。だがルークは涙をぬぐおうともせず静かに泣き続けた。妹の気づかいすら効果がないとなると、そういう重症だ。

「おいおい、勘弁してくれよな～」

「すみません。でも、なんだか悲しくて」

「いや、ま、謝んなくていいけどよー」

サウスは困つたように頭をかきつつ、途中、通りかかった同僚に冷やかされながら宙に視線をさまよわせた。

（おーい、誰か助ける～）

それからしばらくは、所属が違うこともあってシギルとルークが直接会うようなことはなかつたが、たまにすれ違うと気まずい空気が流れた。シギルは妙な態度をとつたことを後悔していましたし、ルークはルークで「たぶん知らないところで傷つけてしまったんだろう」と思い悩んでいたが、お互いに歩み寄る機会を得られないまま時が過ぎてしまっていたのだ。どちらかが、ちょっと声をかけねばすることなのだが、それも簡単なようで、むずかしいのだった。

一三八七年十一月一日。

南大陸に寒気が押し寄せてくる季節である。この時期、第二地球惑星では北半球が夏を迎える、南半球が冬を迎えるのだ。

グラウコスでは一年生に深緑色のロングコートが配布された。裏地には保温効果の高い特殊な生地が使われており、マットな仕上がりの表地は撥水加工がほどこされている。この衣替えにともなって、記章やネームバッヂもコートにつけ替えられた。

シギルは士官用の黒いコートをもらつた。上等兵以下の兵士に渡されるような標準サイズ別の配布とは違い、オーダーメイドだ。十月初旬に寸法を測り、成長も見越して、しっかり仕立てた。が、二ヶ月に一センチ背が伸びている現状を思うと、すぐに補正行きだろう。

そんなささいな面倒事を新たにかかえつつ、シギルは訓練場への道を歩いていた。すると待ち伏せていたらしいサウスに会つた。一七三・五センチとまだまだ小柄ながら、コート姿もサマになつているシギルを見て彼は、

「シルバー！ 最高だな。よく似合つてる。萌えだ、萌え！」

と両腕を広げ、大声を張り上げた。シギルは顔を真っ赤にして歯ぎしりした。

「やめてください！恥ずかしい…」

朝一の台詞がこれである。半分どこか、全面的に冗談で生きているとしか思えないサウスに絡まれるとは、あまり良いすべり出しあとは言えない。

「いーじゃん。褒めてんのに」

「良くありません」

「照れちゃつて、かわいいねえ～。そのウブなところがオジサンにはたまらないよ。十七歳なんて、おいしい年頃だよな～」

(まだ十六だよ)

シギルは無言で突っ込んだ。誕生日も詐称しているのだ。といつても四十日程度だが……

「大佐の歳でオジサンなんて言つてたら、本物のオジサンに怒られますよ？」

「ん～、俺は中身が古くさい男でね。実年齢よりずっと年寄りなんだ」

「そうですか？」

「そうだよ～」

(いや、とてもそつは思えないけどな)

シギルの疑わしい視線に刺されても、サウスは気にする素振りもなく、軽く少年の背を叩いた。

「さ、もう行こうぜ」

と歩を踏み出す。シギルはつられるようにして、サウスと並んで歩いた。本日の出勤先は同じなのだ。

「今日は陸空の合同訓練だなあ。楽しみ楽しみ」

ウキウキしながらニヤけるサウスを、シギルは横目に見た。

「なにが楽しみなんですか」

「バッカ、そんなの決まってるじゃねーか。おまえにちよつかい出すこと&不機嫌なファウストをおちょくること！」

シギルは一~三回口を開閉させて、立ち止まった。

「タチ悪う～！ そのうち絶交されますよ」

よりによつて兄弟そろつて的だというあたりが、さらに最悪である。だがサウスは立ち止まつたシギルをかえりみて、ニッと笑つた。「心配すんな。俺なりの愛情表現さ。アイツもそんなこと、ようく分かつてる。でなきや、とつくに犬猿の仲だ。そんだろ?」

シギルは返事もせず、うなずきもしなかつたが、その青い眼差しで肯定の意を表した。口は悪いし、お調子者だし、遠慮も配慮もないようだが、なぜか周囲の人間に慕われている。それがサウス・ウイビーンという男だ。

サウスは満面の笑みで相槌を打つと、シギルの手を引いて駆け出した。

「ほら、士官が遅刻じゃ、シャレになんねーぞ! はっしれー!」

こうして、合同訓練に使用する陸軍管轄訓練場内に入ると、二人はとたんに不機嫌そうなファウストと出逢つた。彼が不機嫌な理由は、サウスには察することができた。自分を嫌つて避けている少年と連れ立つて現れた、サウスへの不満だ。彼の行為は、わざわざ険悪なムードを作ろうとするものだ。

しかしサウスはいつものテンションで指を鳴らした。

「やつたぜ! さつそく不機嫌

ファウストは眉間を寄せた。

「アホ。朝っぱらから、ふざけるな」

「俺は時を選ばない男だ」

「偉そうに言うな。それは欠点だろ?」

「長所にしどけつて」

「できるか」

ファウストは、言葉ではサウスを否定しつつ笑みを浮かべた。彼は何時も変わらない陽気な友を愛しているのだ。シギルは、遠慮のない言葉を交わし合う二人の間に、同じ戦場で戦い、ともに死の窮地をぐぐり抜けてきた者達が持つ、独特な雰囲気の友情を感じた。（……いいな。俺もいつかこんなふうに一人と話したい。たぶん無

理だけど)

シギルは暗い想いを断ち切るよつと、軽くサウスの腕を叩いた。

「俺、先に行きますよ」

「お？　おお」「

サウスを置いて、シギルは百メートルほど先に見える集団の中にさつさと消える。こんな時、彼の心中を知ることのできないファウストとサウスは淡々と、そろつて同じ意見を口にした。

「相変わらず苦手意識があるようだな」

だがファウストは敬遠されていることに對して（いい氣はしないが）ある程度開き直っていたし、サウスはそういうことに頭を悩ますタイプではなかつたので、言葉に中身はない。「肌が合わないものは仕方ない。仕事が円滑にいけばそれでいい」ということだ。

「俺たちも行くか

サウスが言った、その直後、出動命令を知らせるサイレンが鳴り響いた。

?陸軍および空軍に所属する部隊に告ぐ。ディストール西部で地滑り、土砂災害発生。自治体より救援要請あり。至急、各上官の指示にしたがい、出動せよ？

放送を聞き終えると同時に、ファウストは慣れた動作で近くの内線機を取つた。内線機は情報部に通じていて、

「人身の被害報告は？」

?今のこところありません。主要道路が封鎖されている模様。岩盤などの落石があるようです。二次災害にご注意ください？

ファウストは内線を切り、サウスと歩き出しながら、報告を反復した。

「人身の被害は今のところない。主要道路は封鎖。落石あり。二次災害の可能性もある。じつちはへりを用意する。あとは任せた」

「了解」

災害時の出動はグラウコスの場合、今後、規模の大小で指揮官などの変更がある場合でも、まだ現場を見ないうちは大佐である者が

指揮をとる。特に陸地における災害では陸軍大佐が、海難などでは海軍大佐が主導権を持つ。空軍はどちらにいても出動する代わりといつてはなんだが、性質的に補佐役にまわる。

しかし実のところ、「補佐」は主導権を持つ者と同等の力量か、それを上回る実力を兼ね備えた者でないと務まらない。補佐役は主導者を監視し、必要があれば軌道修正をうながすアドバイザーであるからだ。万が一の場合は全責任を負わねばならない。

現時点で空軍大佐の地位にあるのがファウスト・ロスレイ恩であることは、陸海ともに頼もしいかぎりだった。彼との仕事には間違いないが。「カリスマ」と呼ばれるだけのスキルと実力は当然兼ね備えているので、安心して仕事に取り組めるのだ。

訓練開始のために整列していた兵士たちは放送後、将官の指示にしたがい一人の大佐がやつて来るのを待っていた。大佐が集団の前に立つ将官に敬礼すると、将官の一人が「頼む」と指揮権をあけ渡す。二人は各所属部隊隊員に対して正面を向いた。

「ディストール西部において地滑り、および土砂災害発生。人身被害報告なし。主要道路封鎖。落石あり。二次災害に注意し、現場へ向かう。まず四人乗りのヘリを五台出す。操縦士は俺とケイト・ゴールデン大尉、ショウ・カワサキ先任准尉、アンバー・マクウェル上級軍長、シリング・カーター軍曹。副操縦士にクリント・マーシヤル少佐、ヤン・シュウリン少尉、シエラ・ハーネスト准尉、ナタリー・クルー軍長、シルバー・クラウズ・ラインビル伍長。各自、上等兵一名、二等兵一名を選出し、急行せよ。ほかの者はここで待機。要請があればルーヴ・サーヴァル・メイレン中佐の指示にしたがって行動すること。以上」

ファウストの指示が完了すると、各士官はすばやく動いた。シギルもそれにならつたが、内心、穏やかではなかつた。ファウストの指名を規律にそつて組み合わせると、士官の最下位であるシギルは最上位のファウストと行動しなければならない。言葉にできない動搖が走つた。

(落ち着け。落ち着くんだ)

シギルはしきりと自分に言い聞かせた。

(指示にしたがっていればいいんだ。それだけで、いいんだから)
そんなことを思つてゐるあいだに、ファウストは上等兵、二等兵を選出し終えて、ヘリへ急ぐようにと命令している。シギルは重い足を引きずるようにして、ヘリポートへと急いだ。

方やサウスは、まるで別人の面差しで隊員の前に立つていた。真面目なだけが取り柄というような、厳格さを絵に描いたような眼光の鋭さだ。普段のふざけている彼しか知らない一年生は、そのあまりの凜々しさに啞然とした。

「ディストール西部において地滑り、および土砂災害発生。人身被害報告なし。主要道路封鎖。落石あり。一次災害の可能性がある。気を引き締めて行つてくれ。向かうのは一部隊、各百二十名。三十名ごとに小隊を作つて八隊体制を組む。中隊長にリブ・デリー少佐、アリー・シャ・オーウエン大尉、小隊長にセイル・ニカラフ少尉、ベラルニ・ラチョス先任准尉、ジム・ギルバート准尉、ジョン・ウッド先任曹長、ヨン・スウ・イー曹長、トイチ・アカザワ軍曹、コリー・グリッド下級軍曹、トール・ダナーイ伍長を任命する。第一部隊は現地到着後すぐに調査へ向かい、空軍と合流。第一部隊は迂回路の確保にあたつて利用者の誘導および近隣住民への注意と作業内容の説明を頼む。残りはこの場で待機。ケビン・タイラー中佐の指示にしたがうこと。以上！」

* * *

災害規模は予想以上に大きかつたが、あらためて援軍を要請するほどではなかつた。約二十メートル間の主要道路が、地滑りではがら落ちた十階建てビルに相当する大きさの岩盤によつて破壊されている。片側は谷で、くだりきつた所から一キロほど先に集落が見える。細かな土砂などが流れ続けていて、危険極まりない。

「周辺住民はただちに非難をしてくれ。これから岩盤の撤去作業を行ふ。工事車両をまわせ」

サウスが部下に指示し終えると、すぐ横でファウストが計算書類を広げた。

「持ち合わせのダイナマイトじゃ足りない」「マジで?」

「今、本部に連絡して持つてこさせているが、さつきより天候が悪くなつた。撤去は明日に持ち越しになるかも知れないな」

「うーん。じゃ、準備だけでもやつとくか」「そうだな」

というわけで、岩盤が今の位置からズレないようにするための処置と、ダイナマイトを仕掛けるための穴を開ける作業が始まった。ビルひとつ解体するのに匹敵する作業だ。グラウコスの精銳をもつてしても、撤去は困難をきわめそうだ。

谷の足場は悪く、小雨まで降りだした。コートの表面はフォーマル着のようなマットな質感でありながら高い撥水性があつて簡単には濡れないが、南大陸の中でも最南にあるティストール地方は寒い。小雨が雪に変わるだろ?といふことは誰にも予想できた。機能に優れた軍服とはいえ、寒さを防ぐのには限界がある。

「今日は夜を徹しての作業になりそうだが、みんな風邪引かないようにな」

サウスは全員にそう声をかけて、励ましてまわつた。息はすでに白い。

シギルはこまごまとした作業を手伝いながらも、少し申し訳ない気持ちで、その様子を眺めていた。力を使えば岩盤のひとつやふたつ、始末するのは簡単だ。きっとみんな助かるだろ?。だが使えるない? そんなもどかしさに心が揺れたのだ。

それでもシギルは「絶対に力を使わない」と固く胸に誓わざるを得なかつた。彼は一度も、自分がセフィラでよかつたと思ったことはない。たとえ誰かを救ても、待つてゐるのは偏見だろ?と信じ

ているからだ。今できる」とと言えば、せめてまつたく力に頼らず、みんなと同じ苦労を分かち合つことだけなのだ。

陸空合わせて、最終的な現地到着時刻は午前九時。調査や避難勧告、迂回路の確保などに要した時間が三時間。休憩一時間はさんで本格的な作業開始から、まもなく五時間が経とうとしていた。あたりはすっかり暗い。各所に置かれた照明がチラチラと舞う雪をきらめかせ、もの悲しい陰鬱とした情景を作り出している。

「よし、みんな休憩だ。腹ごしらえしよう」

サウスが言うのを待つてましたとばかりに、みんなは作業を中断し、近くのヘリポートへ移動して夕食をとった。食事は陸軍の一小隊が一時間ほど前から炊事班となつてこしらえた、スープ類中心の暖をとりやすいメニューだ。

「あーつ、生き返るなあ

「まつたくだ」

みなは言い合いながら、食事を口に運び、会話に花を咲かせている。シギルは、そんな人々を眺めて心身を暖めた。

(グラウコスは、いい人達ばかりだな。博士が俺をここへ送つた理由が、わかつた気がする。いつかきっと受け入れてもらえる日が来るんじやないかと思える……けど)

そしてふと、ルーク・リースの姿を見かけて驚いた。彼は第一部隊で空軍と合流せず、作業開始後も近くにいなかつたので、シギルとは顔を合わせなかつたのだ。

(なんだ、ルークも来てたのか)

シギルは声をかけてみようかと思った。しかし今一步、足が動かなかつた。なにげない言葉で話しかければいいというのはわかるが、その言葉が思いつかないのだ。頭の中で右往左往していると、突然、中央付近にサウスが立つて、大声でみんなに注意をうながした。

「今みんなが作業してくれている岩盤向かって左側は、これ以上の立ち入りは危険だ。五メートル以内には近寄らないようにしてくれ。

作業はそれより右側だ。よろしく頼む。今日の仕事はあと少しだから気合い入れていけ！　おまえらだけが頼りだからな！　ケガなんかしてくれるなよ！」

士気を鼓舞しようとする彼に応えて一同は、いつせいに声を上げた。

「イエス・サー！」

総勢二百七十名の軍人の声は圧巻である。疲労もピークを迎えるかとする兵士も腕を上げて応え、なえた心を盛り上げた。サウスはやはり「大陸の龍」の名に恥じない男だと、シギルはうなずいた。

腹も心も満たされた兵士らは、残りの作業に従事した。「今日をしつかりしておけば明日が楽だ」という思いを胸に励んだ者もいる。個々の努力が実って、夜は一時間ほどで作業が完了した。

「よし！ 完璧！ よくやつてくれた。今日はこれで引き上げるぞ。

第一部隊三班！ 先に行つて、テント張つてくれ」

サウスの指示が飛び、部隊は引き上げの準備に入った。第一部隊三班は、ひと足先にヘリポートへ向かつた。

「あ、ちょっと、待つてよ！」

不意にルークの声が聞こえて、シギルは上向きにふり返った。岩盤の上で作業をしていたルークがおりてくるのを認めた。彼はどうやら第一部隊三班のようだ。慌てつつも慎重にくだる。だが、あたりの暗さと焦りが判断を誤らせたようだ。彼は立ち入りを禁止されている場所へ降り立つた。

これを谷のほうから見ていたサウスが、とがめかけた。シギルの耳には同時にゴゴゴ……という地鳴りの音が。見上げると、小石がバラ巴拉と転がっている。次の瞬間、岩盤向かって左側壁面にすさまじい勢いで亀裂が入った。シギルはとっさに叫んで地を蹴つた。

「ルーク！ 危ない！」

シギルの声にハツとしたのが先か、突き飛ばされたのが先か？？ かろうじて安全圏にある道端に転がつて半身を起こしたルークが目の当たりにしたのは、新たに六メートル四方の岩盤が、大量の土砂と一緒に崩れ落ちたあの光景だ。

周囲からは悲鳴があがり、谷のほうからはサウスが血相を変えて駆け登つてくる。

「シルバー！」

ルークは真っ青になり、膝をガクガクと揺らした。サウスはそんなルークの襟首をつかんで立たせ、思いつきり頬を引っ叩いた。

「おまえはっ、俺の注意を聞いていなかつたのか！　ヘリポートへ行つて救護班を呼べ！　早く！」

「は、はい」

泣きそうな部下を叱咤した口調のまま、サウスは近辺にいる者をすばやく集めた。

「大至急、ラインビル伍長の救出にあたる。疲れているとは思うが、もうひと息がんばってくれ」

「イエス・サー！」

ルークは前に転びそうになりながら、ヘリポートへと急いだ。そして先に引き上げてキャンプ設置の指導をしていたファウストの顔を見るなり、泣き出してしまった。

「どうしたんだ」

ファウストは驚いて尋ねながらも、ルークの右頬が赤く腫れているのに気づいた。

「喧嘩でもしたか？」

するとルークは、

「シ、シルバーがつ、俺を助けて岩盤の下敷きに」と嗚咽しながら答えた。

ファウストは目を見開いた。刹那、左肩に痛みを感じた。痛みはすぐに失せたが、ついで、えもいわれぬ不安に襲われた。

「それで？」

「ウイビーン大佐が、は、早く救護班を呼べ、って言つて」

頬はサウスに打たれたのだろうと、ファウストは察した。

「わかった。おまえは現場へ戻れ

「は、はい」

ファウストは踵を返し、ヘリに向かつて走つた。通信機を取り、本部へ救護班を要請すると再びひるがえつて、あたりの兵士をかき

集め、現場へと急行した。

救助活動はサウス指揮のもと始められていた。ファウストはサウスに寄つて声をかけた。

「サウス、どうなつてる？」

ふり返つたサウスは眉をひそめた。一目瞭然のこんな場面で「どうなつてる」とは、あまりにも彼らしくないと思つたのだ。

「動搖してんのか？ そりや俺だつてしてるけど」

「すまん」

「いや、おまえの部下だもんな。動搖して当たり前だ。申し訳ない。これは俺の不始末だ」

「……」

「とりあえず、あいだに入り込んでいる土砂をかき出している。ある程度までいったら端から岩を削る。その繰り返しだな。手作業でないと無理そだから時間は覚悟してくれ」

「救護班はウエスト・ラプワイングから来る。到着まで一時間かかる。状態によつては、ここから車で三十分のところにある救急センターに搬送したほうがいいだろ？」

「ああ」

ひととおり会話を終えると、一人は黙々と作業を進めた。無情にも雪は激しくなり、一寸労働してきた兵士たちの身体に鞭を打つ。数十分。

着けているだけで革手袋は役に立たない。ファウストは凍える手で土をかきながら、まるで墓土を掘り返しているような錯覚におちつた。たとえ一分で救出できたとしても生存の可能性は低い。それなのに、これほどの時をかけても見つけられずにいるのだ。不安よりも絶望が募る。

再び胸がざわついた。

（こんな状況には嫌といつほど出逢つたはずだ。もつとひどい現場にいたこともある。目の前で仲間を失うなんてことは軍人ならば多

々あることだ。悼む気持ちを常にいだいては捨て、乗り越えねばならない悲しみを乗り越えてきた。しかし過去のどんな場面にもなかつた苦しみが、ここにはある??なぜなんだ。息がつまる。心臓が張り裂けそうだ)

おのれが当惑する意味も解せぬまま、ファウストはただただ、一心不乱に土砂をかき出した。

(ラインビル、頼む、生きていってくれ)

すると突然のように、壁面と岩とのあいだに隙間が現れた。窮屈でも少年一人ならば、なんとか入っていられそうな空間だ。

ファウストは、はやる気持ちをおさえられず、取りついで声を上げた。

「ラインビル！返事をしろ！」

直属の部下でも間接的な付き合いしかない。上司としても好かれていよいようだし、優秀なだけに面倒も見る必要がなかつた。ここまで不安を駆り立てられる理由はないはずだ。だが今朝、同じヘリに乗つて来たばかりだ。ついさっきまで、となりに座つていた。そういう思つと居ても立つてもいられなかつた。

* * *

暗く冷たく悶ざされたわずかな空間で、シギルはかすかな息をもらし、不意に意識を取り戻した。左肩に激痛が走る。

「うつ」

あからさまに力を使うわけにはいかなかつたが死ぬわけにもいかず、ルークを自力で突き飛ばしたあの隙に、岩の重量を落下しきる寸前、十分の一に軽減させ、すかさず壁面と岩のあいだに滑り込んだのだ。おかげで左肩をしたたか打つた以外にケガはない。しかし、さすがに衝撃を受けて気を失つていたのだつた。

(まいつたな。ルークは大丈夫だつたかな?)

それから数十分を、シギルはじつと身動きせず耐えた。みんなが

自分以上にがんばつているだろ？と思つと、そのぐらいはなんでもなかつた。

* * *

「ラインビル！ 返事をしろ！」

外気が流れ込んできたかと思つと同時にファウストの声が飛び込んできて、シギルはギョッとした。せっぱ詰まつたような叫びに全身が震え、鳥肌が立つた。彼が先陣を切つて自分を呼ぶなんてことは、まったく想像していなかつただけに。しかも、シーランの兄弟という抗えない宿命が彼の血を騒がせているとしか思えない声で？？ めつたに感情を表さないファウストが痛いほどせつなく叫号するのを見た者は、憂えるべき状況を忘れて驚いた。サウスですらそうであつたから、これはもう一種の事件だ。

シギルは恐る恐る唇を動かした。

「俺は大丈夫です」

シギルの声を確認したファウストは、三田口にしなかつた水を飲み干したような安堵に満たされた。

「神よ、感謝します」

と小さくつぶやく。

極度の緊張から解かれた彼の深い吐息は岩壁に反響して、シギルにまで伝わつた。シギルはそれだけで、ファウストがどれほどの想いでいたのか理解できた。

その後方ではサウスが満面の笑みを浮かべながら、大声で「ラインビルは無事だ！」と仲間達に告げている。歓声が上がつた。

「やつたぞ！ すげえ！」

「なんて運のいい奴だ！ まったく」

この吉報を誰より喜んだのはルークだ。彼はその場にへたりこみ、また泣いてしまつた。近くの者が彼を起こして慰める。

「良かつたな」

そしてシギルの生還を心から喜ぶ人々の声に交じって、またファウストの声が近く響いた。

「すぐに出してやる。がんばれよ」

聞いたこともない優しい声に、シギルは強く目をつむった。泣きそうだった。

（？？兄さんは気づいていない。だけど本能で知っている。魂が、俺を弟だと知っているんだ）

過去、ラウ・コード博士が学者らしくない話をしていたのを思い出す。

『シーランの兄弟は、分けるべきではない一個体の魂を分かつて生まれたと思えるほど、心身に密接な関わりを持つて生きる。それは？絆？とひと言で片付けるには強すぎるものだ。私の新しい仮説では、一般に言われている彼らの？失う恐怖？とは、単純に肉体における物質的な喪失の恐れではなく、同じ次元にあるべき魂の別離にともなう精神性の痛み、または欠落し、不安定になることへの恐れと解釈している。そういう考えに基づくと？得る喜び？についても説明ができるようになる。つまり、得れば魂が安定するのだ。それは幸福ではないかね？あの世にいる期間とこの世にある期間が同時進行であればあるほど長い安定が得られ？良い？ということになる。そのことが、たまたま？兄弟愛？という形式をとつて表れるのだよ。死に別れる恐怖に勝ち得る喜びとはなにかを追求していくと、これが最も有力な説となりはしないかね？』

仮説はおそらく正しいのではないだろうか、とシギルは思う。でなければ、どうして自分が弟であることを知らないファウストが、空軍大佐の顔でもグラウコスの鷹でもない素の声で、外聞もなく叫ぶことができたろう。

（だけど言えない。弟だなんて言えない。俺は兄さんの？不幸？でしかないんだ。言えるわけがない）

常々感じていたことではあるが、シギルはこの時ほど切実に生まることを後悔したことなかった。

(博士、俺はどうしたらいいんだ。わからないよ。教えてくれ。昔のように心配はいらないと肩を叩いてくれ)

生存が確認されてから、およそ一十分。シギルはようやく隙間から引きずり出された。その彼があまりにもあっけなく立ち上がったのを見て、周囲はしきりに驚き呆れ、また喜んだ。

「こいつつ、心配したぞ！」

ど、いきなりサウスが抱きしめる。ちょうど腕が左肩を押さえたので、シギルは思わず声を上げた。

「いつ、痛い痛い！　さすがに無傷じゃないんです！　離してください！」

「わっ！」

サウスは解放して真剣に謝った。

「すまん！　どこをケガした？」

「左肩。打つただけですが」

「左肩？」

不意にファウストが眉をひそめた。事故の報告を受けたとき、自分が左肩に痛みが走ったのを思い出したのだ。

「どうかしたのか？」

とはサウスがファウストに聞いた。ファウストはやや慌てたように目を伏せた。

「いや、なんでも」

しかし、なんらかの含みを持つファウストの表情をシギルは見逃さなかつた。ささいなことでも弟だと知れる可能性があるのに、この事故は大きなミステイクだった。おそらく兄の身に変調があつたに違いないと、彼は想像を絶する強い結びつきに畏れをなした。意志の力だけでは太刀打ちできない何かを感じたのだ。

「救護班が到着しているはずだ。ヘリポートへ引き上げよう。歩け

るか？」

懐中時計を見てサウスが言い、シギルはゆつくつづなずいた。そして歩き出しながら謝った。

「すみません。救護班、呼んだんですね」
サウスは「は？」と険しく目元をしかめた。
「あたりまえだろ。大事故だ」
「でも、結局たいしたことなかつたのに」
「んなこと関係あるか。無駄足になつて良かつたぜ。救護班もホツとするだろ？」

救護班にはドクター・マーロウ氏（五十一歳）が同行していた。軍医歴が長く、腕が最も確かな医師だ。白髪まじりの黒髪に茶色い目の、痩せた小柄な男。

テントの中にストーブを入れた臨時の診療所が設けられた。そこでシギルは上半身裸になつて診察を受けた。

「全治一週間。不便だとは思うが、私がいいと言つまで腕をあげたりしてはいけないよ。もつとも、あげようと思つてもあがらないだらうけどね」

シギルは自分で考えていたより重い診断だったので、訝しげに医師を見据えた。

「そんなんにヒドイですか？」

「ひどいね。打ち身による鬱血の範囲が広いし、おそらく骨にヒビが入つているだろ。よくもまあ骨折にまで至らなかつたものだ。氣絶しただろ？」

「うつ、はい」

「念のため脳の検査もしたほうがいいね。すぐに病院へ行こう」

「えつ、今から？」

「もちろんだ。なにかあつては手遅れになる。もともと疲労していた身体にこれだけの打撃を受けたんだ。めだつた外傷が肩だけだからと安心してはいけないよ。目には見えないダメージだつてあるは

すだ。明日の昼頃まで検査入院してもらう。場合によつては二～三日に入院も必要だ」

「……」

ドクター・マーロウは黙り込んだ少年をチラリと見やつた。

「何故そんなに嫌そうな顔をするのかね」

シギルは焦つてうつむいた。「段階系が判別されてしまうような検査はないだろうけど、もしあつたら困る」という一抹の不安が、そうさせたのだ。特に血液型検査は。

「あのね、命があつただけでも拾いものだよ？ 釘を刺しておくれどね、入院にならなくとも完治するまで絶対安静だ。わかつたね？」

「はい」

シギルはしづしふ返事をし、付き添いの看護師に手を借りて制服を着た。そして医師とテントを出ると、心配そつな多くの視線にさらされた。

「どうなんだ？」

とサウスが代表して尋ね、シギルは申し訳なさそうに答えた。

「すみません。これから検査入院です。あと一週間は絶対安静だそうです」

「ええっ！？」

サウスも意想外だつたようだ。それほどシギルはピンピンして見えた。サウスとその横にいたファウストの目が自分に向いたのを確認した医師は、シギルにヘリヘ搭乗するように言つて追い払うと、一人の大佐と対面した。

「久しぶりだね、ファウスト君、サウス君。元気そうでなによりだ」

「先生もお元気そうで」

「いやなに。ところで彼は、どちらの部下かな？」

「俺です」

とファウストが軽く手をあげた。医師は「ほほお」と感心したようく顎をなでた。そして「苦労するぞ」とズバリ言った。

「実にガマン強い少年だ。あんなのでは医師の私も苦労する

どう反応していいのか戸惑っているファウストに代わって、サウスが肩をすくめた。

「なにが言いたいんだよ、ドクター」

医師は「ほつほつ」と笑った。

「なんでもなさそうにしているが、あの肩はそうひとつ痛むはずだ。おそらく立っているのもツライくらいにな」

ファウストとサウスは不意に目を合わせた。互いに半信半疑な表情だ。

それを見た医師は更に諭した。

「仲間を助けたそしだが、きっとその者に気をつかっているのだろう。しかし、もっと身体の痛みに正直な反応を示してもらわねば処置に迷ってしまう。彼になにかあつた時は、見た目の十倍はひどい状態だと思ったほうがいいだろうね」

一人はしばし呆気にとられた。サウスは特にそしだが、二人とも察しのよい人間だ。軍人としてもベテランで、同僚や部下の動向を観察するのは得意なのだ。誰がなにをガマンしているかくらい見通せる。ところが「ラインビル伍長」についてはチラリとも見抜けなかつたのである。

「病院まで付き添つて行つてもいいか?」

と、ファウストは医師とサウスとに向けて言つた。「優秀という先入観から、あまりにも放つたらかしすぎた。上司としてこんなことでは良くない」と反省したことだった。彼らはその心情をくみ取り、快く賛成した。

「こつちは任せとおけ」

「悪いが頼む」

ファウストは医師とともにヘリへ向かつた。救護班を移送してきたヘリは五人乗りで、行きの搭乗者は操縦士と医師、看護師一人の三人だけだったので、シギルとファウストが乗り込んで丁度いい。機内に入ると、シギルは打つて変わって具合悪そうに後部座席に腰かけていた。医師の言うことは間違いないようだと、ファウスト

は近寄つて声をかけた。

「大丈夫か？」

シギルはわずかに目を開き、右手で顔を覆つて息を吐いた。

「麻酔があると、ありがたいです」

続いて乗り込みながら聞き耳を立てたマーロウ医師が、医療バッグに手をかけた。

「早く言いたまえ」

医師はさつそくシギルの肩に麻酔を打つた。

「すぐに効く。眠くなつたら素直に寝なさい」「はい」

ヘリが飛び立つた。操縦士の横に医師が座り、シギルは看護師とファウストにはさまれる形で後部座席に身を預けた。ファウストがどういう経緯で同行しているのか判明せず、しばらく困惑していたシギルだが、やがて眠気に襲われると医師の言葉にしたがつて目を閉じた。

無意識にファウストのほうへもたれる。おぼえていないはずだが、とても懐かしい匂いがした。

懐かしさを感じたのはファウストも同じだった。しかし彼は「もしかしたら」と考えていた。サウスがやたらと「似ている」と連呼するので、「自分はもしかしたらラインビルに弟の面影を重ねて見ているのかも知れない」と。それならば、少年が生き埋めになつていたあいだの異常な不安も説明がつく。

ファウストは一人うなずいた。

（きっと、そうに違ひない）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4800/>

ロスト・フィラデルフィア

2011年11月18日03時23分発行